

東京藝術大学大学院 美術研究科 美術専攻 芸術学（美学）研究領域  
平成 29 年度博士学位請求論文

バウムガルテン美学研究  
一般修辞学を基礎とした芸術理論の構想

氏名：井奥陽子

学籍番号：1313923

## 目次

序論 修辞学の変容と近代美学の誕生	…… 1
背景——修辞学と美学の連続性とその断絶	
先行研究と問題の所在——発展史観に起因する修辞学の閉却	
目的・方法・特色——バウムガルテン美学の芸術記号論としての可能性	
構成と概要	
第1章 1740年頃の体系構想にみるバウムガルテン美学の特徴	…… 9
——記号の解釈・表現の学としての美学	
第1節 思想形成期の区分	
第2節 美学体系の構想	
第1項 哲学の体系	
第2項 『形而上学』(第2版 1743年)における美学の部門	
第3項 『一般哲学』および『哲学的百科事典の素描』における美学の体系	
第3節 自由学芸の再編——多様な技術の包摂と、その主軸としての〈一般修辞学〉	
第4節 自由な技術の外延——記号論的発想による諸技術の総合	
第2章 〈感性的認識の学〉とは何か	…… 34
第1節 能力論対制作論という解釈の困難	
第2節 認識と記号表示の統合	
第3節 認識と記号表示の各々の意味——res et verba から	
第4節 「認識論(gnoseologia)」としての美学	
第5節 感性的認識の主体は誰か	
第3章 規則——例外と詩的自由	…… 46
第1節 規則の衝突とその解消——存在論における規定	
第2節 例外と完全性の関係——世界論における規定	
第3節 美の規則における例外の許容	
第4節 詩的言語の完全性	

第4章	フィグーラの扱いをめぐる『美学』の体系問題	…… 58
第1節	美学と詩学・修辞学	
第2節	古典修辞学における彩	
第3節	彩の概念の普遍化——部門の拡張とジャンルの拡張	
第4節	思考の美としての彩——修辞的表現における認識と記号	
第5章	フィグーラ——修辞的文彩から〈美しい部分〉へ	…… 72
第1節	記号表示のフィグーラ	
第2節	絵画論・音楽論における修辞的文彩の応用とバウムガルテンの独自性	
第3節	絵画への適用例(1)同義法	
第4節	絵画への適用例(2)省略法	
第6章	アルグーメンタ——論理的・修辞的論証法から〈力を及ぼすもの〉へ	…… 86
第1節	根拠として認識された表象	
第1項	経験的心理学における定義	
第2項	論理学における定義	
第3項	美学における定義	
第2節	力の種類に応じた六分法	
第3節	事例——例証と帰納法	
第4節	美的アルグーメンタの射程——図像への適用	
結語	一般修辞学としての美学の可能性	…… 105
文献表		…… 112
巻末資料		…… 121
(1)	略年表と著作一覧	
(2)	『美学』の章立て	
(3)	『一般哲学』における美学体系	
(4)	『哲学的百科事典の素描』における美学体系	
(5)	『美学』と『美学講義録』におけるアルグーメンタとフィグーラ	



はなく、『美学』の序論以降を捲ったことのある者であれば、『美学』は古代修辞学を土台とした文芸創作論だという印象を受けるだろう。『美学』の章立て（巻末資料2を参照）や主要概念の多くが修辞学を源泉に持ち、バウムガルテン自身の理論の根拠付けや比較のために頻繁に引用されるのは、クインティリアーヌス（Marcus Fabius Quintilianus, ca. 35–ca. 100）やキケロー（Marcus Tullius Cicero, 106 B.C.–43 B.C.）などによる古代修辞学書である。修辞学は古代ギリシャ・ローマで大成されてから初期近代に至るまで、自由学芸の三学（文法学、論理学、修辞学）のひとつとして西洋世界で連綿と受け継がれてきた技法である。だが、バウムガルテンは美学を新たな学問として提唱したはずである。そもそもバウムガルテンは *aesthetica* というこの学科名を、「アイステーシス [= 感覚的知覚] の学」を意味するギリシャ語 *ἐπιστήμη αισθητική* から造語し（MP § 116）、美学を「感性的認識の学（*scientia cognitionis sensitivae*）」と定義した（AE § 1）。この有名な定義から多くの方は、美的体験あるいは広く日常的経験における感性の働きについて考察する、いわゆる感性論としての美学を期待し、バウムガルテンの美学は想像力や判断力などを主題とした能力論であって然るべきだと考える。こうした理解に沿うならば、『美学』には感性論ないし能力論としての定義と修辞学ないし創作論としての内実とのあいだに齟齬が生じている、とみなされることになる。

そのため、バウムガルテンの『美学』は伝統的修辞学に依拠して言語芸術を論じたものであるから、新たな学問には値せず、能力論としても、さらには芸術論としても狭すぎる、と繰り返し語られてきた（e. g. Beiser 2011, 119）。バウムガルテンの用語で表わせば、彼の美学は「下位認識論（*gnoseologia inferior*）」（AE § 1）にも「自由な技術の理論（*theoria liberalium artium*）」（*ibid.*）にさえも値しない、とみなされてきた。こうした評価は18世紀当時からみうけられる。たとえば能力論としての不足についてはヘルダー（Johann Gottfried von Herder, 1744–1803）が、芸術論としての不足についてはズルツァー（Johann Georg Sulzer, 1720–1779）が、それぞれ自著のなかで論難している（Herder 1769, 14–25; Sulzer 1771, 48）。

近代美学と修辞学との密接な結びつきは、メンデルスゾーン（Moses Mendelssohn, 1729–1786）やヘルダーといった、バウムガルテンの次の世代に早くも解ける。現代の目から見れば、それは時代の趨勢でもあった。ロマン主義美学は美の自律性を確立し、芸術作品を独創的な天才によるその内面の発露とみなすため、大衆の説得を目的として規則にしたがった文章作成を指南する修辞学とは、相容れないからである。主体の独創性を追求するロマン主義の台頭が一因となって、修辞学は18世紀をとおして急速に衰退——あるいは別の分野へ分散・変容——し、19世紀には公教育から姿を消すことになる<sup>5</sup>。「美学の主観主義化

<sup>5</sup>



(Subjektivierung)」(ガダマー 1986(1960) 60ff.) を引き起こしたカントの『判断力批判』を経たドイツ美学において、修辞学の伝統はもはや前景には浮上しない<sup>6</sup>。修辞学史研究では、バウムガルテンの『美学』の出現をもって「1750 年以前は「修辞学の時代」で、1750 年以後は「美学の時代」である」(Schanze 1982, 17) あるいは「修辞学が終わりをつげたちょうどそのとき美学が始まる」(トドロフ 2011(1977), 181) と表現されることがあるが、修辞学を前身とするかぎりでの美学は、バウムガルテンの直弟子であるマイアー (Georg Friedrich Meier, 1718–1777) の直後で断絶する。バウムガルテン美学と修辞学との関連を問うことは、後代に受け継がれなかった近代美学の揺籃期の姿を探究することである。

### 先行研究と問題の所在——発展史観に起因する修辞学の閑却

19 世紀中頃に出版されて 20 世紀に入っても影響力のあった R. v. ツィーマーマンや R. H. ロッツェの美学史書では、バウムガルテンの美学はライプニッツ (Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646–1716) の予定調和説を土台にしたものあるいは「借用」したものと説明される (Zimmermann 1858, 159–184; Lotze 1868, 4–17)。そのため、紹介される内容としては認識の分類と虚構論に重点が置かれており、修辞学はまったく顧みられていない。それどころかロッツェは、バウムガルテンによって「ドイツ美学はその対象の著しい軽視とともに始まった」と断ずる (Lotze 1868, 12)。W. ヴィンデルバントによる哲学史書でも、バウムガルテンが美学を創設したのは美や芸術へ関心を持っていたからではなく、たんにヴォルフ哲学の体系上の欠を補うためであったと言われ、バウムガルテンは結局「美学をほとんど詩学にしてしまい、ただ古代および近代の詩学者たちが提出していた技巧的規則を体系的に説明するにとどまっている」という裁定を下される (ヴィンデルバント 1956(1878), 349–353)。ロッツェやヴィンデルバントの影響は多大で、バウムガルテンは長らく、実作品への関心や感性が欠如したまま美学を提唱し、感性をあくまでも理性と知性に従属する不完全なものとなし、偏屈な合理主義者と捉えられてきた。そして美学研究においても哲学研究においても、カントによって乗り越えられた講壇哲学者の一人にすぎないと等閑視されてきた<sup>7</sup>。

20 世紀に入ると、B. クローチェや E. カッシーラーおよび A. ボイムラーを嚆矢として、19 世紀の否定的評価に修正が加えられ、バウムガルテンは合理主義的に感性を理性と知性へ従属させたのではなく、感性に独自の価値を主張したのだと認められるようになる。そして 20 世紀半ばを過ぎると、近代思想研究の進展も相俟ってバウムガルテン研究が盛んにな

---

●  
●  
●  
●  
●  
●

るが、しかしバウムガルテン美学と伝統的修辞学との連続性が消極的ないし否定的に捉えられるという大局は変わらなかった。なぜなら筆者のみるところ、なかでも 1980 年頃までのバウムガルテン研究は、カントやロマン主義との共通点を強調する傾向にあるからである。むしろ後代への影響を指摘することは有益であるが、こうした立ち位置からは修辞学が議論の俎上に載せられ難く、たとえ言及されたとしても修辞学との連続性を積極的に評価し難いのである。前述のように、18 世紀末には修辞学がもはや過去の遺物として軽視されたのだから、そうした「天才美学 (Genieästhetik)」や「主観主義 (Subjektivismus)」あるいはときに「非合理主義 (Irrationalismus)」と特徴づけられる思想の兆しとしてバウムガルテンを読むならば、伝統的修辞学は消極的な扱いを受けざるをえない。

その典型例が、バウムガルテンによる美学の創始をロマン主義的非合理主義の先駆とみなし、かつバウムガルテンの美学と伝統的修辞学との関係に着目した、A. ボイムラーと M.-L. リンの古典的研究である。ボイムラーは、「美学的問題の歴史に対する修辞学の伝統がもつ意義は、あまりに知られておらず研究されてもいない」(Baumler 1972(1934), 52) とつとに指摘し、「バウムガルテンの功績に肉薄するためには修辞学へ接続しなければならない」と主張した (Baumler 1967(1923), 123, 210)。しかしながら、修辞学の理論を美学へ援用する利点として彼が認めるのは、具体的な事例によって論理的表現よりも分かりやすく伝えることができる点に限られ、大衆の説得という「外的な目的」を目指す修辞学は基本的に美学へ「有害な影響」を及ぼすと述べられる (Baumler 1967(1923), 122f., 210–213)。リンは「バウムガルテンの『美学』と古代修辞学」と題した論文において、『美学』における修辞学に由来する構成や主要概念について、キケローやクインティリアヌスらの修辞学書における対応箇所を網羅的に示した。だが彼女の結論としては、バウムガルテンの美学は「感情的で非合理的な要素を修辞学体系の内部で強調し、[修辞学の] 合理的な要素を弱め」たものであり、その功績は「古代作家の権威に守られながらも」、「次の時代に完全に支配的になる主観的なもの、天性 (Genie)、独創性へ場を与えた」点に認められる (Linn 1967, 443)。ロマン主義的非合理主義の萌芽としてバウムガルテンを読むならば、修辞学の利用はバウムガルテンの美学理論にとって本質的ではないとみなされ、修辞学が本来目指すはずの規則による形式化という点は度外視されることになる<sup>8</sup>。



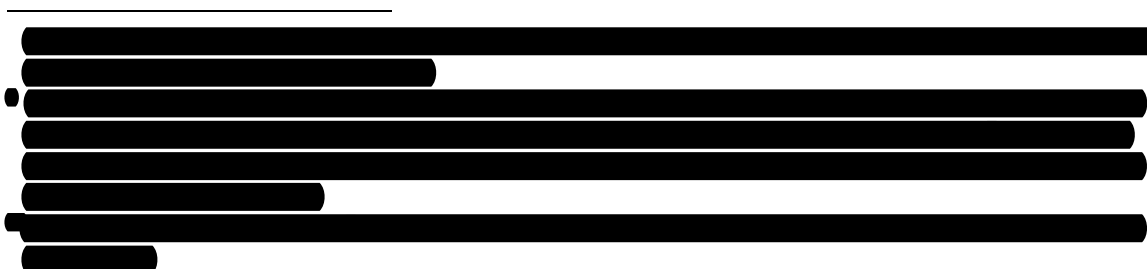
学科としての美学がその誕生時に修辞学と密接に結びついていたことの意義を吟味するためには、カントやロマン主義をドイツ近代美学の成熟期とみなしてそれらとの連続性を過度に強調することでバウムガルテンを評価するような、発展史観的な見方を留保する必要がある。さらに、ただ『美学』と修辞学書との共通点やまったくの相違点を挙げるのではなく、共通点のなかにある相違点を見極めることによって、バウムガルテンが美学に修辞学を利用した積極的な意味を問わなければならない。

20世紀末には感性論としての美学の隆盛と連動してバウムガルテンへの関心が高まり、今世紀に入ってからは、テキストの校訂・翻訳や論文集の刊行などが相次いでなされ、研究分野も実践哲学や神学などへ広がり多様化するなど、バウムガルテン研究は活況を呈している。そのなかで、文学理論研究の泰斗である R. カンペと A. ハーファーカンブは、知における修辞学の役割を重要視したルネサンス人文主義の延長線上にバウムガルテンの美学を位置づける見方を打ち出している<sup>9</sup>。両者によれば、バウムガルテンの美学とは、ルネサンス人文主義が試みていたクインティリアーナスの修辞学の復権が、初めてその全範囲において成就されたものであり (Haverkamp 2014(2002), 22)、ルネサンス以来試みられてきた修辞学改革が確固とした理論となった、「修辞学の普遍化の成功」であった (Campe 2014b(2005), 125f.)。こうした見解のもとで彼らは、バウムガルテン美学における隠喩 (metaphora) や明証性 (evidentia) といった修辞学的概念を主題とする論考を発表している<sup>10</sup>。

本研究は、バウムガルテンの美学を彼が知りえなかった次の時代のカントやロマン主義美学から遡及的に眺めるのではなく、バウムガルテンへ至るまでの修辞学史のなかに位置づける見方を、カンペやハーファーカンブと共有する。ただし別の発展史観に陥らないよう、バウムガルテン美学をルネサンス人文主義以来の修辞学改革の成就ないし完成と主張することは差し控え、バウムガルテン自身のテキストの読解に傾注したい。

## 目的・方法・特色——バウムガルテン美学の芸術記号論としての可能性

本研究の目的は、バウムガルテンが新しい学問である美学を形成するために、すでに長い歴史をもっていた修辞学を利用した意図と意義を問うことで、修辞学からの影響が顕著な『美学』によって彼が何を成そうとしていたのか、その核心に迫ることである。そのために





本研究は、バウムガルテンの美学をロマン主義美学へ至る出発点としてみるのではなく、古代以来の伝統を汲む修辞学史へ連ねる視座を採る。そして、バウムガルテンが美学においてどのように修辞学を換骨奪胎しようとしたのか、修辞学に由来する個々の概念に則して探究する方法を採る。

本研究の独自性は、『美学』および『美学講義録』（推定 1750–51 年採録、1907 年出版）<sup>11</sup> の仔細な読解をとおして、『美学』における修辞学に由来する概念が言語芸術のみならず造形芸術や音楽へも応用可能なものとして考えられていたことを解明する点にある。それによって本研究は、従来バウムガルテンへなされてきた芸術論としての不足についての批判（上記「背景」参照）に対して、直接的に応答する。加えて、バウムガルテンによって拡張された修辞学的概念が認識の観点から説明・分類されることから、能力論としての不足についての批判に対しても間接的に応答する。そうして、バウムガルテンの『美学』には、修辞学を普遍化することで、言語のみならず図像や音などの記号へもその理論を応用するという、現代記号論にも通じる発想があったことを主張する。本研究が表題に掲げる「一般修辞学」とは、そうした芸術記号論の発想に立脚して再構築された修辞学のことである。

バウムガルテンの美学を現代的な記号論の観点から読むというアプローチ自体は筆者に独自のものではなく、バウムガルテンの美学における記号 (signum) の概念が果たす役割にかんしては、重要な先行研究がすでに出ている (e. g. Franke 1979; 小田部 1994, 13–57; Peres 2000)。だが本研究は、そうした先行研究と以下の点において異なる。フランケやペレスがバウムガルテンにおける記号論として、『美学』の第 1 部「理論的美学」の第 1 章「発見論 (heuristica)」と第 2 章「方法論 (methodologia)」と第 3 章「記号論 (semiotica)」のうちの最後の章のみを、つまり『美学』が第 1 章の終盤で中断されたために実現されなかった章のことを指しているのに対して、本研究ではバウムガルテンの美学の軸に記号論の発想があることを、『美学』の第 1 章「発見論」のうちに (第 4 章)、さらには遺稿の『一般哲学』 (1770 年公刊) と『哲学的百科事典の素描』 (1769 年公刊、以下『素描』) における、『美学』の計画全体よりも遥かに広大な美学体系のうちに (第 1 章) みいだす点である。また、記号の概念のみならず「フィグーラ (figura)」と「アルグーメンタ (argumenta)」という修辞学由来の概念に注目し、それらが言語だけでなく図像や音へも適用可能なものとしてバウムガルテン自身が想定していたことを、具体的に指摘する点である (第 5–6 章)。

---

<sup>11</sup> [REDACTED]

## 構成と概要

本研究の概要は以下のとおりである。

まず『美学』の考察に着手する前に、第1章「1740年頃の体系構想にみるバウムガルテン美学の特徴——記号の解釈・表現の学」では、1740年頃に執筆された『一般哲学』と『素描』における美学体系について考察し、〈一般修辞学〉の観点から『美学』を読み解く妥当性と必要性を示す。そのために、バウムガルテンの美学の軸には〈記号の解釈・表現についての学〉があることを指摘する。そして未完に終わった『美学』とは、修辞学を普遍化した〈一般修辞学〉を実践することで、記号の解釈・表現の学としての美学の基盤を築く試みであったのではないか、という見解を提示する。

第2章「〈感性的認識の学〉とは何か」では、通常はいわゆる感性論を標榜したものと理解されている「感性的認識の学」という美学の定義を、可能なかぎりバウムガルテンの意図に即しつつ、〈事柄と言葉 (res et verba)〉という修辞学の伝統的な概念を援用して解釈する。そして、この定義は主題の着想とその表現を意味していると主張する。これによって、バウムガルテンの『美学』のうちには定義と内実とのあいだに齟齬はなく、この定義が修辞学を基盤とした美学に悖るものではないことを示す。

以上を踏まえて第3章以降では、その〈一般修辞学〉としての美学がどのように実践されたのか、すなわちバウムガルテンが『美学』において修辞学をいかにして換骨奪胎したのか、「規則」「フィグーラ」「アルグーメンタ」という個々の概念に則して検討する。

第3章「規則——例外と詩的自由」では、「規則 (regula)」の概念について、「例外 (exemptio)」との関連から考察する。そして、修辞学が規則化を目指すのと同様に、バウムガルテンが美の規則の体系化によって美学を基礎づけることを目指したこと、そしてライプニッツの最善説における悪の許容についての議論を規則と例外の関係として『形而上学』(初版1739年、第4版1757年)において定式化し、美学へ応用したことを明らかにする。そのことをとおして、バウムガルテンが目指した美の規則の体系は非常に柔軟かつ複雑なものであったことを指摘する。

第4章「フィグーラの扱いをめぐる『美学』の体系問題」では、先行研究において『美学』の大きな瑕疵とみなされてきた、第3章の記号論で扱われるべき「フィグーラ (figura)」が第1章の発見論で「アルグーメンタ (argumenta)」とともに多く論じられたという問題を扱う。そして、バウムガルテンが伝統的修辞学におけるフィグーラ (修辞的文彩) の概念を〈格別に美しい部分〉という概念に普遍化し、フィグーラを論じる部門とフィグーラを適用するジャンルという2方向でこの概念を拡張したことを明らかにする。さらにバウムガルテンが記号に対する思考の優位という見解に立脚していることを指摘し、このこととフィグーラの部門の拡張という観点から、『美学』におけるフィグーラの扱いについて説明を与え、『美学』の体系上の整合性は保たれていると主張する。

第5章「フィグーラ——修辞的文彩から〈美しい部分〉へ」では、バウムガルテンによるフィ

グーラをジャンルの拡張という観点から考察し、この概念がいかにして言語以外の記号へと適用されるのか、『美学講義録』における断片的な記述の分析をとおして検証する。そして、講義録に記録された「絵画におけるフィグーラ」についての言及が、テキストと絵画の複雑な相互作用から生まれたものであることを解明する。そのことをとおして、バウムガルテンと現代修辞学における「視覚的文彩 (visual figure)」の理論との親近性を指摘する。

第6章「アルグーメンタ——論理的・修辭的論証から〈力を及ぼすもの〉へ」では、アルグーメンタの概念について、『形而上学』および『論理学講義』(初版1761年、第2版1773年)における規定も検討しながら考察する。それによって、バウムガルテンが論理学と修辞学に由来するアルグーメンタ(論証法・論拠)の概念を〈論理的ないし美的な力を及ぼすもの〉という概念へ変容させ、さらに美学におけるアルグーメンタの概念には彫刻などの図像も含まれうると考えていたことを明らかにする。

以上の考察をとおして、バウムガルテンの『<sup>テキスト</sup>美学』の主軸には、記号の概念に支えられて、図像や音へも応用しうる普遍化された修辞学を確立する試みがあったことを解明する。このように本研究は、バウムガルテン美学と伝統的修辞学との結びつきを積極的に捉え直すことをとおして、バウムガルテン美学がもつ〈一般修辞学〉を基礎とした芸術理論としての豊かな可能性を指摘する。

## 第1章 1740年頃の体系構想にみるバウムガルテン美学の特徴

### ——記号の解釈・表現の学としての美学——

バウムガルテンは生涯の大半を大学教師として過ごし、著述活動より講義活動を積極的に行った。そのため現在の我々には、彼の思想を知るためのテキストが十分に残されているとは言い難い。公刊された著作も多くが大学の教科書用に出版されたものであるため、詳細は講義で補われるよう想定されており、テキストには主要な命題が簡潔な文体で記されるに留まっている。テキストの不足という問題は、彼が創設した美学の分野でもついてまわる。学位論文『詩にかんする少なからざることについての哲学的省察』（1735年）の主題は詩学を合理哲学と結びつける「詩の哲学（*philosophia poetica*）」（MP praefatio）を試みることであり、美学については論文の結びにおいて、詩の哲学を拡大することで美学という学が可能になると主張されるに留まる（MP §§ 115–117）。また『美学』（第1巻1750年、第2巻1758年）は第1巻の出版後にバウムガルテンが病に倒れたため、目次で示された計画の6分の1にも満たずに中断されてしまった。そのため、『美学』の内部にのみ留まっているのは、バウムガルテンが思い描いていた美学の内実も、『美学』の狙いさえも、十分に捉えることはできない。

そこで、『美学』における個々の概念についての考察へ入る前に、本章では遺稿出版された『一般哲学』（1770年公刊）と『哲学的百科事典の素描』（1769年公刊、以下『素描』）を紐解く。そこに記されたバウムガルテンによる美学の設計図を考察することによって、バウムガルテンが学位論文における美学の宣言から『美学』における実践へ至るあいだの1737–1740年頃にどのようにその構想を練っていたのか、明らかにすることを目指す。そして、バウムガルテンによる哲学的学科としての美学の創設にはどのような目論見があり、彼がどのようにして美学を実現しようと考えていたのか検討する。

『一般哲学』と『素描』はバウムガルテンが1737–1740年頃<sup>12</sup>に哲学入門の講義で論じた内容が、没後にJ. C.フェルスター（Johann Christian Foerster, 1735–1798）の編集によって出版されたものであり、そのなかには哲学体系についての記述がある。ともに遺稿であるうえ、美学にかんしてはその下位部門がただ無味乾燥に列挙されることから、先行研究では言及されたとしても概略が触れられるのみであった（e. g. Bergman 1911, 17–20; Franke 1972, 22–26; Niggli 1999, 115–117; Bahr 2004, 42f.）<sup>13</sup>。しかしこれらの遺稿では、『美学』の目次で示された計画全体も大幅に越え出るような、広大な美学体系が画策されている。それゆえ、バウムガルテンが『美学』で修辞学を利用した意義を吟味するためには、これらの美

<sup>12</sup> 執筆時期の推定については、本章第1節で後述する。

<sup>13</sup> 『一般哲学』にはシュヴァイツァーによるドイツ語への抄訳があるが、細分目は取り上げられておらず、中項目についても訳出する箇所を取捨選択がやや恣意的である（Baumgarten 1983, 73–78）。

学体系の詳細は明らかにされる必要がある。そこで本研究では、遺稿に記された美学体系を細分目に亘るまで再構成することで、バウムガルテンが思い描いていた美学のもっとも広い外延を示すことを試みる。

本章の構成と内容は以下のとおりである。まず第1節では、バウムガルテンの美学思想の形成時期を便宜的に5つに区分し、彼の美学思想は2巻の『美学』が上梓された1750年代よりむしろ1740年頃に大きく発展したことを主張する。そのうえで、本章が主な対象とする『一般哲学』と『素描』の執筆時期が1739–40年頃と推定されることを確認し、両者がバウムガルテンの美学思想の発展を窺い知るために重要なテキストであることを示す。続いて第2節では、『一般哲学』と『素描』における美学体系を整理・俯瞰する。またそれに先行して、予備的考察として、『論理学講義』（第1版1761年）に記された哲学体系と、主著の『形而上学』（第2版1743年）に示された美学の部門を整理する。第3節と第4節では *artes liberales* の2つの意味、すなわち「自由学芸」と「自由な技術」という主題にそれぞれ則して、バウムガルテン美学の特徴を第2節の結果から考察する。

本章の考察をとおして、バウムガルテンの美学とは自由学芸の三学の再編と連動して、種々の技術を哲学へ組み込む企てであり、『美学』とは普遍化ないし哲学化された修辞学すなわち〈一般修辞学〉を確立することによって、そうした広大な体系をもつ美学の理論的基盤を作る試みであった、という見解が提示されるだろう。

## 第1節 思想形成期の区分

[Redacted content]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

---

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[Redacted text block]

[Redacted text block]





[Redacted text block]

第2項 『形而上学』（第2版 1743年）における美学の部門

[Redacted text block]

2 『形而上学』第2版における美学の部門

[Redacted]				[Redacted]				
[Redacted]				[Redacted]				
[Redacted]				[Redacted]				
[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]			[Redacted]
				[Redacted]	[Redacted]			[Redacted]
				[Redacted]	[Redacted]			[Redacted]
				[Redacted]	[Redacted]			[Redacted]
				[Redacted]	[Redacted]			[Redacted]
				[Redacted]	[Redacted]			[Redacted]
				[Redacted]	[Redacted]			[Redacted]
				[Redacted]	[Redacted]			[Redacted]
				[Redacted]	[Redacted]			[Redacted]
				[Redacted]	[Redacted]			[Redacted]
				[Redacted]	[Redacted]			[Redacted]
				[Redacted]	[Redacted]			[Redacted]
[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
				[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
				[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
				[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
				[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
				[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
				[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
				[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
				[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
				[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
				[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
				[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
[Redacted]				[Redacted]				
[Redacted]				[Redacted]				
[Redacted]				[Redacted]				

[Redacted text block]

第3項 『一般哲学』 および 『哲学的百科事典の素描』 における美学の体系

[Redacted text block]

[Redacted text block]



[Redacted text block]

[Redacted text block]



[Redacted text block 1]

[Redacted text block 2]

[Redacted text block 3]

[Redacted text block 4]

[Redacted text block 5]

[Redacted text block 6]

---

[Redacted text block 7]



[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

---

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

---

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

### 第3節 自由学芸の再編

——多様な技術の包摂と、その主軸としての〈一般修辞学〉

前

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

---

[Redacted text block]

[Redacted text block 1]

[Redacted text block 2]

[Redacted text block 3]

[Redacted text block 4]

[Redacted text block 5]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

---

[REDACTED]

[Redacted text block]

第 4 節 自由な技術の外延——記号論発想による諸技術の総合

[Redacted text block]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

---

[REDACTED]



[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

銘

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

---

[Redacted text block]

[Redacted text block]

結び

[Redacted text block]

---

[Redacted text block]

## 第2章 〈感性的認識の学〉とは何か

本章では「感性的認識の学」という美学の定義について、前章で示した〈一般修辞学〉すなわち哲学化ないし普遍化された修辞学としての美学との関連から検討する。

バウムガルテンは学位論文『詩にかんする少なからざることについての哲学的省察』（1735年、以下『哲学的省察』）で美学を提唱する際、その新たな学問を「或るものを感性的に認識することの学（scientia[ ] sensitivae quid cognoscendi）」と説明した（MP § 114；強調省略）。その後、『形而上学』（第1版1739年）における「感性的に認識することと叙述することについての学（scientia sensitivae cognoscendi et proponendi）は《美学》である」（MT1 § 533）という定義付けを経て、『美学』第1巻（1750年）冒頭では有名な「《美学》とは、感性的認識の学である」（AE § 1）という定義が登場する。

この「感性的認識の学」という定義は往々にして、主体における下位認識能力の働きそのものについて論じる能力論を標榜したものと理解されている。たとえば「感性論美学（Asthetik）」という旗印のもと、美や芸術に限定されてきた従来の美学を刷新して日常経験における感性の働きについて扱おうとする W. ヴェルシュあるいは G. ベーメなどが、美学を感性論として捉え直すことの正当性をバウムガルテンによるこの定義に帰すことは、そうした事態を端的に表している（cf. ベーメ 2005(2001), 1-11; ヴェルシュ 1998(1993)）。だがバウムガルテンが『美学』で展開したのはむしろ詩学・修辞学の性格をもつ制作論であったのだから、そのような理解のもとでは、『美学』には能力論としての定義と制作論としての内実とのあいだに避けがたい食い違いが生じていることになる。それでは、『美学』では実際にそのような不整合があるのだろうか。前章で筆者がバウムガルテン美学の主軸とみなした修辞学の一般化ないし哲学化の試みも、「感性的認識の学」から逸脱したものなのだろうか。

「感性的認識の学」という定義が人口に膾炙する一方で、バウムガルテンの著作のなかで当時もっとも読まれて版を重ねた『形而上学』では、「感性的に認識することと叙述することについての学」という美学の定義には全版（第2版1743年～第7版1779年）をとおして、つまり美学講義や『美学』の出版を行うあいだも変更がなされなかった。それゆえ、『美学』における「感性的認識の学」という定義の意味を吟味するためには、『形而上学』における感性的認識と感性的叙述が各々何を指すのかを解明し、かつ『美学』と『形而上学』における美学の定義の関係を明らかにする必要がある。なぜ『美学』においては「叙述すること」の語が削除されながらも、他方で『形而上学』においてはその文言が保持され続けたのか。『美学』における「感性的認識の学」とは、『形而上学』における「感性に認識することと叙述することの学」の前半のみを指すのか、あるいは別の含意があるのか。

上記の点を解明するため、本章の考察は次のように進められる。まず第1節では、先行研究において支配的である解釈を整理し、その解釈から生じる不都合を示す。第2節では、『美学』において「叙述すること」の語が削除された理由を、『美学講義録』（推定1750-51

年採録、1907年出版)におけるバウムガルテン自身の発言から明らかにし、この定義は〈感性的認識の学〉と〈感性的叙述の学〉の前者のみを指すのではなく、両者の総合であること、それゆえに『美学』と『形而上学』の定義が共存しえたことを示す。それを踏まえて第3節では、感性的認識と感性的叙述が各々何を意味するのか、修辞学における〈事柄と言葉 (res et verba)〉という概念を手がかりに解釈する。それによって、両者およびその総合である〈感性的認識の学〉とは、或る主題を着想することとそれを詩や絵画などに表現することとを意味する、という見解を提示する。続いて第4節では、バウムガルテン自身が美学を論理学とともに「認識論 (gnoseologia)」と呼ぶことの意味を考察し、第3節で示した見解がバウムガルテンの言う「認識論」と矛盾しないことを示す。最後に第5節では、そのように解釈された美学の定義を作者と受容者という観点から検討する。そして、この定義における「感性的認識」の主体はまずもって作者を指すが、しかし受容者にも当てはめる可能性を孕んでいることを主張する。

以上のような考察をとおして、感性的認識の学という定義が受容体験にかんする能力論を直接的に指すという一般的な解釈に対して否定的に応答し、この定義が修辞学を基盤とした美学に悖るものではないことを明らかにする。

## 第1節 能力論対制作論という解釈の困難

[Redacted text block]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

---

[REDACTED]

[Redacted text block]

第 2 節 認識と記号表示の総合

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]



[Redacted text block]

第 3 節 認識と記号表示のそれぞれの意味——res et verba

[Redacted text block]

[REDACTED]

[REDACTED]

---

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

#### 第4節 「認識論 (gnoseologia)」としての美学

● [Redacted text block]

[Redacted text block]

● [Redacted text block]

---

[Redacted text block]

[Redacted text block]

第 5 節 感性的認識の主体は誰か

[Redacted text block]

---

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

結び

[Redacted text block]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]



### 第3章 規則

#### ——例外と詩的自由——

バウムガルテンは『美学』（第1巻1750年、第2巻1758年）において、「技術（ars）」を「秩序づけられて配置された諸々の規則の総体〔*complexus regularum ordine dispositarum*〕（AE § 68; cf. KA § 10, S. 77; § 68, S. 110）と定義し、美的な技術（ars aesthetica）が判明に（*distincte*）捉えられたとき美学が学問（*scientia*）として高められる、と述べた（AE § 74; cf. AE § 71; KA § 71, S. 111）。こうした見解は後のカントによって批判される。カントは『純粹理性批判』（第1版1781年、第2版1787年）の超越論的感性論のなかで、バウムガルテンによる「美についての批判的判定を理性原理のもとにもたらし、その判定の規則を学問へと高める」という希望は「見当違いである」と断じた（KrVAA. 50 Anm.）。さらに『判断力批判』（1790年）ではヴォルフ学派の完全性の美学を否定し、「趣味についてのいかなる客観的原理も可能ではない」と主張した（KU § 34）。

こうしたカントによるバウムガルテン美学の棄却は、古典主義の規範詩学・修辞学からロマン主義の天才美学への変遷を印づけるものとみなされている。17世紀に支配的であった、古代作家を範例として規則に倣って詩や弁論を作成する規範詩学・規範修辞学は、18世紀が終わる頃には、芸術作品を天才による独創的な創造とみなす天才美学に取って代わられる。たしかに古典的な詩学・修辞学においても生得的な性質としての資質（*ingenium*）や詩的熱狂（*furor poeticus*）が求められるが、しかしあくまでもそれらに規則が優先されるかぎりにおいてである。そのためバウムガルテンを擁護する立場にある先行研究は、バウムガルテンは規則よりも天性（*Ingenium; Genie*）による独創性を重視したのであり、よってロマン主義の天才美学の出発点にあるのだ、と強調してきた（e. g. Nivellet 1971, 23–24; 37; Linn 1974, 112–115; 124–125; Witte 2000, 47–48）。

なるほど、バウムガルテンは「何か新しいものを創造する性向〔*Anlage, etwas Neues zu schaffen*〕」としての創作する能力（*facultas fingendi*）が美しい思考に必須だと述べるかぎりにおいて（AE § 34; KA § 34, S. 88f.; MT § 589）、独創性を要求する立場に与してはいる。しかしバウムガルテンにおける *ingenium* は、広義には「資質」という意味で、狭義には「機知」という意味で用いられているのだから<sup>47</sup>、これらの先行研究のように *Genie*（天性、天賦の才）と同一視して規則と対置することは正確ではない。そのみならず、バウムガルテンにとっては美の規則を体系化することが *ingenium* や独創性の評価よりも上位の目的であったことは明白である。というのも、彼は学科としての美学に学問的な確実性を要求し、自

<sup>47</sup> *ingenium* は、広義には認識能力が互いに均衡状態にあること（*proportio*）と定義され（MT § 648）、狭義には「事物の同一性を観察する習性」とされる（MT § 572）。広義の *ingenium* にはその多寡によって「快活な（*vegetus*）」および「怠惰な（*tardus*）」という形容詞が付される（MT § 648）。

らが美学を提唱する以前の美や芸術にかんする論考を指して、「美の規則があちこちに散在していたあいだは、このように〔＝美学が学としての確実性をもつと〕言うことはできなかつた」(KA § 1, S. 71) と述べるからである。

それゆえ本研究では、バウムガルテンをロマン主義美学の先駆とみなす立場からはひとまず距離を置き、規範詩学・規範修辞学の特徴とされる「規則」の方からバウムガルテン美学を考察する。そして、バウムガルテンが美学の学問としての正当性を主張するために、美の規則をどのようにして「秩序づけられて配置」しようとしていたのか、「例外(exceptio)」の概念に注目しつつ明らかにすることを目指す<sup>48</sup>。

バウムガルテンの『美学』における美の規則の構造は、『形而上学』(初版 1739 年、第 4 版 1757 年)の世界論における、最善世界での例外の許容についての議論を応用したものであり、さらにその世界論の議論の基礎となる規則や例外の概念は、同書の存在論での規定を土台にしている。そのため、本章の考察は次のように進められる。まず第 1 節では、『形而上学』第 1 部「存在論」における規則の衝突とその解消の理論について、ヴォルフやマイアールのテキストを援用しつつ整理する。第 2 節では、『形而上学』第 2 部「世界論」における例外と完全性の関係について扱う。それらを踏まえて第 3 節では、存在論と世界論で提示された例外と完全性についての議論が、美学においてどのように適用されるか考察する。最後に第 4 節では、文学において例外が問題となる「詩的自由」の観点から、バウムガルテンの美学における例外の議論に検討を加える。

本章の考察をとおして、バウムガルテンが構築しようとしていた美学の体系とは、様々な規則が複雑かつ柔軟な関係にあるものであること、そしてバウムガルテンが美における例外の多さを強調することをとおして、詩的言語がもつ完全性の大きさを主張していたことが示されるだろう。なお本章は規則の構造ないし関係に注目するため、個々の規則が指示する内容やその妥当性については検討しないことを予め断っておく。

## 第 1 節 規則の衝突とその解消——存在論における規定

[Redacted text block]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

---

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[Redacted text block]

第 2 節 例外と完全性の関係——世界論における規定

● [Redacted text block]

● [Redacted text block]

● [Redacted text block]

● [Redacted text block]

● [Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

第 3 節 美の規則における例外の許容

- [Redacted list item 1]
- [Redacted list item 2]
- [Redacted list item 3]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

---

[Redacted text block]



[Redacted text block]

第 4 節 詩的言語の完全性と詩の自由

[Redacted text block]

[Redacted text block 1]

[Redacted text block 2]

[Redacted text block 3]

[Redacted text block 4]

[Redacted text block]

結び

[Redacted text block]

[REDACTED]

## 第4章 フィグーラの扱いをめぐる『美学』の体系問題

本章と次章では、修辞学とバウムガルテン美学の両者に共通して重要な概念である「フィグーラ (figura)」について考察する。本章ではまず、この概念を扱う際に解決すべき、『美学』の体系にかかわる問題を検討する。

第1章と第2章でも触れたように、『美学』(第1巻1750年、第2巻1758年)が伝統的修辞学に準拠していることを明示するものとして、その章立てがよく知られている(『美学』の章立てについては巻末資料2を参照)。『美学』第1部は「発見論 (heuristica)」、「配列論 (methodologia)」、「記号論 (semiotica)」という3つの章に分かたれる。これらは修辞学における弁論生成のための3部門、すなわち主題を選択する「発想 (inventio)」、構成を定める「配置 (dispositio)」、個々の言語表現を与える「措辞 (elocutio)」の部門にそれぞれ対応する<sup>58</sup>。バウムガルテンの規定では、発見論における考察対象は「思考 (cogitatio; Gedanke)」ないし「事柄 (res; Sache)」であり<sup>59</sup>、配列論では「順序 (ordo; Ordnung)」ないし「配置 (Disposition)」、記号論では「記号 (signum; Zeichen)」ないし「記号表示 (significatio; Bezeichnung)」である(AE § 13, §§ 18–20; KA § 13, S. 79; §§ 18–20, S. 81f.)。ところが、倒置法や修辞疑問といった修辞技法を指す「フィグーラ」にかんしては、古代修辞学では第3の措辞部門で扱われるにもかかわらず、『美学』では第1の発見論のなかで多く挙げられるという顕著な相違がある。『美学』の第1章「発見論」は、認識の美についての一般論と特殊論に分かたれ、特殊論はさらに、第1巻収録の(a)「美的な人の特徴」、(b)「美的豊かさ」、(c)「美的大きさ」、(d)「美的真理」、および第2巻収録の(e)「美的光」、(f)「美的確実性」、そして未執筆のg「認識の美的生命」から成る。フィグーラにかんする議論は、このうち(b)から(f)の各部分で1節以上を設けて展開され、(g)でも論じられる予定であった(cf. AE § 26; § 142, S. 141)。細かい分類も含めると、この発見論のなかで約120ものフィグーラが挙げられる(巻末資料5を参照)<sup>60</sup>。

バウムガルテンによるこの一見奇妙なフィグーラの扱いは、先行研究では、『美学』の体系上の混乱を示すものとみなされてきた。たとえば、『美学』と古代修辞学との関連を包括的に考察し、現在でもしばしば参照されるM.-L. リンの論文では、バウムガルテンがフィグーラを記号論ではなく発見論で扱うことは体系性や内的必然性に欠けると評される(Linn 1967, 442)。またF. ベルントは、バウムガルテンは記号論の中心主題となるはずのフィグ

<sup>58</sup> 伝統的修辞学の部門はさらに「記憶 (memoria)」と「発表 (actio)」を加えた5つから成るが、修辞学が話す技術から書く技術へと移行するにしたがって、前3部門が中心となったとされる。ただしドゥエの指摘によれば、イエズス会によっては近代をとおして5部門が保持されたまま教授された(ドゥエ 2008, 76)。なお厳密に言えば、『美学』の記号論には発表部門も含まれる(AE § 20)。

<sup>59</sup> 『美学』におけるresとcogitatioについては、本研究第2章のとりわけ第3節を参照。

<sup>60</sup> aでは11種、bでは29種、cでは8種、dでは73種、eは7種が挙げられる。重複する8つを除いて合計120と数えた。ただし転義法の数「数えきれないほどある」(AE § 782)と言われるように、120という数はバウムガルテンにとってすべての彩を枚挙したものではない。なおdで扱われる数がとくに多いのは、比較 (comparatio) と換喩 (metonymia) の下位分類が詳細にわたることが一因である。



[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

---

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]



## 第2節 伝統的修辞学におけるフィグーラ

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

---

[Redacted text block]

[Redacted text block]

第3節 フィグーラ概念の普遍化——部門の拡張とジャンルの拡張

[Redacted text block]

---

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

---

[REDACTED]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted line]

[Redacted text block]

#### 第4節 思考の美としてのフィグーラ——修辭的表現における認識と記号

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

---

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

---

[REDACTED]



[Redacted text block]

結び

[Redacted text block]



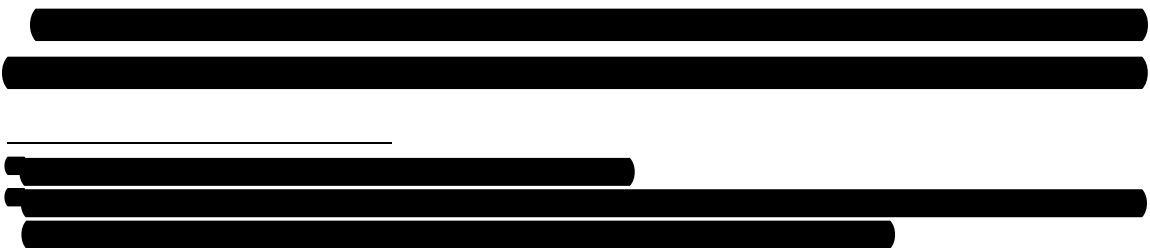
## 第5章 フィグーラ

### ——修辭的文彩から〈美しい部分〉へ——

前章でも述べたように、バウムガルテンが挙げる修辭疑問や隱喩といった個々のフィグーラをみれば、この概念には修辭学における名称と定義が踏襲されていることは明らかである。だが他方、修辭学ではフィグーラが通常の言語表現からの逸脱とみなされるのに対して、バウムガルテンは格別に美しい部分と定義し、この定義がもつ普遍性は美学に独自のものと自負していた。その普遍性のひとつとして考えられていたのが、言語芸術以外への適用可能性であった。たしかに『美学』（第1巻1750年、第2巻1758年）では、もっぱら古典ラテン文学から事例が引かれる。しかし『美学講義録』（推定1750–51年採録、1907年出版）<sup>80</sup>には、絵画におけるフィグーラにかんする記述がわずかながら残されている。その記述は非常に断片的で、従来の研究では看過されてきた<sup>81</sup>。だがバウムガルテン美学がいかにして「自由な技術の理論」（AE § 1）つまり芸術論たりうるのか、具体的に示すものとして検討に値する。また、視覚的記号にフィグーラを応用した「視覚的フィグーラ (visual figure)」は現代修辭学で提唱された概念であるから、バウムガルテンの試みは現代の議論と親近性をもつものとして注目すべきである。そこで本章は、バウムガルテンによるフィグーラの他ジャンルへの応用について、その内実と思想史上の位置づけを解明することを目指す。

本章は次のような構成から成る。第1節では、バウムガルテンによるフィグーラにかんする議論を、適用ジャンルの拡張という観点から、記号および「記号表示のフィグーラ」という概念に即して改めて整理する。第2節では、背景として考えうる美学・芸術論の言説を概観し、バウムガルテンの独自性を検討する。第3節と第4節では、『美学講義録』で言及される絵画におけるフィグーラについて、バウムガルテンの想定していた作品と表現方法、およびその着想の源泉を掘り起こすことを試みる。これらの考察をとおして、伝統的修辭学を利用することで可能になったバウムガルテン美学の特徴のひとつを明らかにし、現代修辭学における視覚的フィグーラの理論の先駆という新たなバウムガルテン美学像を提示する。

#### 第1節 フィグーラの記号一般への適用可能性



[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

---

[REDACTED]

[Redacted text block]

第2節 絵画論・音楽論における修辞的文彩の応用とバウムガルテンの独自性

[Redacted text block]

---

[Redacted text block]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

---

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[Redacted text block]

### 第3節 絵画への適用例(1) 同義法

[Redacted text block]

[Redacted text block]

---

[Redacted text block]

[Redacted text block]



[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

---

[REDACTED]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

第 4 節 絵画への適用例 (2) 省略法

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

---

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

---

[Redacted text block]

図1 《イーピゲネイアの犠牲》、1世紀頃、フレスコ、



146×140cm、ナポリ、国立考古学博物館 (Public domain, via Wikimedia Commons)

[REDACTED]

[REDACTED]

---

[REDACTED]

[Redacted text block]

結び

[Redacted text block]

---

[Redacted text block]

[Redacted text block 1]

[Redacted text block 2]

[Redacted text block 3]



## 第6章 アルグーメンタ

### ——論理的・修辭的論証法から〈力を及ぼすもの〉へ——

バウムガルテンの主著『形而上学』(初版 1739 年)は、ヴォルフ学派の形而上学(存在論、宇宙論、心理学、自然神学)を 1000 の項目に纏めあげた著作である。未完の『美学』(第 1 巻 1750 年、第 2 巻 1758 年)が当時ほとんど紐解かれなかったのとは対照的に、カントなどによって大学の教科書として広く用いられ、版を 7 回重ねた。バウムガルテンはその『形而上学』の第 4 版(1757 年)で初めて、「広義のアルグーメンタ (*argumenta laetus dicta*)」という概念を第 3 部第 1 章「経験的心理学」において追加する。『形而上学』に大幅な加筆が施されたのは第 2 版(1743 年)と第 3 版(1750 年)であり、スモールキャピタル表記の術語が第 4 版以降で追加されることは珍しい。ところが、バウムガルテンはこの概念に対して十分な説明を与えていない。当該箇所では、「私の魂のなかにある認識とその表象が根拠 [*ratio*] である」という文言の直後に、その言い換えとして「《広義のアルグーメンタ》である」と挿入されるのみである (MT4 § 515)。『形而上学』のその他の箇所でアルグーメンタが言及されることはない。認識や表象が根拠であるとはどういった事態を指すのか。想定される「狭義のアルグーメンタ」はどのように位置づけられるのか。そして、広義のアルグーメンタという概念が、体系としてすでに整っていた第 4 版で追加されたのは何故か。

本稿では、これらの問いに対する回答を提示するため、バウムガルテンの論理学と美学におけるアルグーメンタ概念に検討を加える。バウムガルテンの哲学体系において形而上学の第 3 部門を構成する心理学は、魂 (*anima*) について一般的に考察する学問と定義される (MT § 501; PG § 147)。魂について特殊的に考察する道具的哲学(美学と論理学)および実践的哲学(法学、倫理学、家政学と政治学)は、心理学によって原理を与えられる (MT § 502; cf. AL1 §§ 7f.)。これらの学科のうちでアルグーメンタの概念が重要な役割を果たすが、道具的哲学であり、とりわけ美学である。『論理学講義』(初版 1761 年、第 2 版 1765 年、第 3 版 1773 年)では、「理論的論理学」の第 3 部「推理論」において、そこでの主題である「推論 (*ratiocinium*)」の同義語にアルグーメンタが用いられる。『美学』では『形而上学』と同様に、アルグーメンタが根拠としての表象と定義される。さらに、実際に執筆されたテキストの大部分を占める第 1 部「理論的美学」第 1 章「発見論」(B)「認識の美についての特殊論」において、その部門を構成する 6 つの章の各々に、アルグーメンタを見出しに掲げた節が 1 つ以上設けられる。経験的心理学におけるアルグーメンタの概念は、論理学と美学におけるこれらの概念を明らかにすることによってはじめて理解される。

先行研究では、『美学』におけるアルグーメンタが伝統的修辭学における論法概念と相違ないとみなされてきたために、バウムガルテンにおけるアルグーメンタの概念そのものを問うことはほとんど等閑に付されており、同概念に関する経験的心理学と道具的哲学の

関連についてはこれまで考察されてこなかった<sup>100</sup>。たとえば S. テデスコは『美学』におけるアルグーメンタの定義に着目し、バウムガルテン美学においてアルグーメンタが「傑出した役割」を担うと強調するものの、アルグーメンタは完全性としての美における規定根拠に対して与えられた名称であるから、バウムガルテンにとって美とは「多くの修辭的論証法の結果 (das Ergebnis mehrerer rhetorisch-argumentativer Verfahren)」であると論じるに留まり、やはりアルグーメンタを修辭的論法と同一視している (Tedesco 2008, 145; 147-149)。たしかに『美学』の発見論は、伝統的修辭学において説得推論 (enthymema) を中心とした論法を主題とする発想 (inventio) の部門に由来する。個々のアルグーメンタとしても、バウムガルテンは暗示黙過 (praeteritio)、漸層法 (climax)、理由追加 (actiologia)、比較法 (comparatio) といった修辭的論法に由来する名称とその事例を挙げる (AE § 148; § 334ff.; § 545f.; § 734f.)<sup>101</sup>。しかしながら、『美学』におけるアルグーメンタの概念を修辭学におけるものと同等のものともみなすならば、バウムガルテンがこの概念を経験的心理学と美学において (根拠としての表象) と定義した意義を見落してしまうだろう。それによって、バウムガルテン美学の射程を不当に狭く見積もることになるだろう。

本章では、「広義のアルグーメンタ」という概念が『形而上学』第4版という比較的遅い時期に追加されたのは、美学において修辭的論法を越え出るようなアルグーメンタ概念が展開されたことに起因する、という見解を提示する。そのために、バウムガルテンが「根拠」に関わる「力 (vis; Kraft)」と「連結 (nexus; Zusammenhang)」というヴォルフ学派の鍵概念をとおして、伝統的な論理学や修辭学におけるアルグーメンタの概念を鑄直したことを解明する。結論を先取りすれば、根拠の概念でもって定義されるバウムガルテンにおけるアルグーメンタの概念は、複数の命題からなる論理的ないし修辭的な証明およびその論拠という、論理学と修辭学におけるアルグーメンタの用語法に一方で依拠している。他方、バウムガルテンは根拠を力の帰属先と規定するため、アルグーメンタは論理的ないし美的な力を及ぼすものとして捉えられる。美的な力を持つものとしてのアルグーメンタはもはや、一連

[Redacted text block]

の命題から成る修辭的論法だけを指すものではなくなる。バウムガルテンは『美学』において、句や単語の単位の言葉もアルグーメンタを見出しに掲げた節で数多く挙げる。『美学講義録』(推定 1750-51 年採録、1907 年出版)では、図像でさえ、帰結との連結において捉えられるかぎりでアルグーメンタと呼ばれうることを示唆する。本章の考察によって、アルグーメンタの概念には、修辭学を利用した芸術論というバウムガルテン美学の独自性が発揮されていることが明らかになるだろう。

本章は以下のような手順で進められる。第 1 節ではアルグーメンタの定義について、経験的心理学、論理学、美学の順に考察する<sup>102</sup>。第 2 節ではアルグーメンタの分類について、バウムガルテンが明示していない区分も再構築しつつ整理し、広義と狭義のアルグーメンタについて採りうる解釈を提示する。さらに第 3 節では、論理学および美学におけるアルグーメンタの事例を示し、両者の特徴と相違をより明確にする。最後に第 4 節では、美学におけるアルグーメンタ概念の射程について、定義の再検討と『美学講義録』の読解をとおして考察する。

## 第 1 節 根拠として認識された表象

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

第 1 項 経験的心理学における定義

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

第2項 論理学における定義

[Redacted text block]

---

[Redacted text block]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

---

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

---

[REDACTED]

[Redacted text block]

第3項 美学における定義

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

---

[Redacted text block]



[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

---

[Redacted text block]

## 第 2 節 カの種類に応じた 6 分法

[Redacted text block]

[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]

表 6 心理学・論理学・美学における、認識を完全にする 6 要素と、力とアルグーメンタの分類

11 [Redacted footnote text]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

---

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

---

[REDACTED]

[REDACTED]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

### 第 3 節 事例——例証と帰納法

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

---

[REDACTED]



[Redacted text block]

#### 第 4 節 美的アルグーメンタの射程——図像への適用

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

---

[Redacted text block]



[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

結び

[Redacted text block]

[REDACTED]

## 結論 一般修辞学としての美学の可能性

本研究は、従来否定的ないし消極的に捉えられがちであったバウムガルテンの『美学』（第1巻1750年、第2巻1758年）と伝統的修辞学との結びつきについて、バウムガルテンが美学において修辞学をどのように換骨奪胎したのか考察することをとおして、その意義を検討してきた。各章の結論は以下のとおりである。

第1章「1740年頃の体系構想にみるバウムガルテン美学の特徴——記号の解釈・表現の学」では、『美学』第1巻公表の10年程前に、すなわちバウムガルテンが自ら提唱した学に実質を与えようと試行錯誤していたであろう頃に執筆された、遺稿の『一般哲学』（1770年出版）と『哲学的百科事典の素描』（1769年出版、以下『素描』）に注目し、未完に終わった『美学』には顕在化していないバウムガルテン美学の特徴をとりだすことを試みた。それによって、〈一般修辞学〉の観点から『美学』を読み解くことの妥当性と必要性を示した。

『一般哲学』と『素描』のなかで行われた哲学体系すなわち「哲学的百科事典」の構築とは、伝統的な自由学芸を再編すること、つまり教養科目としての哲学部を再編することを意味していたことをまず指摘した。そのうえで筆者は、これまで詳細が明らかにされてこなかったこれらの著作における美学体系を可能なかぎり再構成することをとおして、以下のことを明らかにした。すなわちバウムガルテンが構想していた美学とは、第1に、自由学芸の三学うちの修辞学と文法学をその柱として取り込んだ——ただし『素描』では文法学は美学から切り離れた——ものであった。ヴォルフによる「自由学芸の哲学」という提言をおそらく引き受けた「普遍詩学」・「普遍修辞学」ないし「一般詩学」・「一般修辞学」という美学の主要部門は、初期の1730年代の著作でのみ用いられる表現であるが、この普遍化された詩学・修辞学は一貫してバウムガルテン美学の中核にあったことが読みとれた。第2に、遺稿に示されたバウムガルテンの美学とは、そうした詩学・修辞学とともに絵画論や音楽論ではなく、占術や観相学や紋章学といった、上級学部には算入されえない種々の技術を大量に包摂したものであった。哲学体系の再編の際に、未だ内容の定まっていなかった美学が、そうした技術の算入の受け皿となったと考えられた。そうして包摂された多種多様な技術のうちには、近代的な芸術の概念ではなくむしろ、記号を解釈することおよび記号で表現することについての理論という綴じ糸が見いだされえた。以上のことから、『美学』とは修辞学を普遍化ないし哲学化した〈一般修辞学〉を実践することによって、〈記号の解釈・表現についての学〉を主軸とした美学理論の屋台骨を築く試みであったのではないか、という見解を導き出した。

第2章「〈感性的認識の学〉とは何か」では、『美学』冒頭においてバウムガルテンが提示する「感性的認識の学」という美学の定義へ検討を加えた。そして、この定義がしばしば美的体験における受容者の感性の働きについて論じる能力論を標榜したものと理解されている

ことに対して否定的に応答し、この定義が第1章で提示した〈一般修辞学〉を基盤とした美学に悖るものではないことを主張した。

多くの先行研究では、主著の『形而上学』（初版1739年、第4版1757年、第7版1779年まで重版）における「感性的に認識することと叙述することについての学」という美学の定義のうち、〈感性的認識の学〉と〈感性的叙述の学〉がそれぞれ能力論と制作論を指し、『美学』では後者が削除されたと理解されてきた。しかしこの解釈では、当時から広く読まれ度々重版していた『形而上学』における定義に『美学』の出版後も修正がなかったことや、『美学』の内容には削除されたはずの制作論の性格が強いことなどを説明できず、多くの不整合をバウムガルテンに帰することになってしまう。そこでまず注目すべきは『美学講義録』（推定1750–51年採録、1907年出版）に残された発言であり、その記述から、バウムガルテンは「感性的認識の学」に〈感性的認識の獲得の学〉と〈感性的認識の叙述ないし記号表示の学〉を含意させていたことが読みとれた。そしてこの感性的認識の獲得と記号表示という対を筆者は伝統的修辞学の〈事柄と言葉〉という概念から読解することを試み、この対は主題となる事柄を考案することと、それを作品のうちに表現することを意味すると解釈した。この解釈は、バウムガルテンが美学を「認識論 (gnoseologia)」と呼ぶこととも矛盾しなかった。というのも、バウムガルテンにとって認識能力そのものを論じることは心理学の役割であり、バウムガルテンは詩学・修辞学をいわば前身とする美学が哲学の一学科に値すると主張することをおそらく意図して、詩的・修辭的言語がもつ特徴を心理学の用語でもって説明し、そのことでもって美学を論理学とともに認識論と呼ぶからである。このように解釈された「感性的認識の学」という定義は、『美学』の実際の内容がそうであるように、受容者ではなく作者の側に焦点を当てた理論である。ただし、バウムガルテンが美学を大学の教養科目として講じたことや、或る同一の対象でも主体が認識する構えの相違によって美に相応しいか否かが変わってくると論じたことから、『美学』の理論はその適用範囲が職業芸術家に限られるわけでもなく、美的体験における認識について論じる余地が排除されているわけでもなかった。バウムガルテンの『美学』が作者および受容者の認識についても説明を与えうることは、第4章から第6章の個別的考察からも補強された。

第1章と第2章の考察から、バウムガルテンの『美学』とは、心理学における能力論の概念を用いて伝統的な修辞学理論を再構築したものであり、そのようにして普遍化された〈一般修辞学〉の理論は、一方では言語だけでなく図像や音なども含めた様々な記号を扱いうる射程を、他方ではたんなる創作活動の指南にとどまらず認識についての理論としての射程を有したものと結論づけた。そして第3章以降では、『美学』において修辞学の普遍化がいかんしてなされたのか、そして『美学』の理論は実際にそうした射程を有していたのか、「規則」「フィグーラ」「アルグーメンタ」という個々の概念に即して検証した。

第3章「規則——例外と詩的自由」では、規則の概念について扱った。いくつかの先行研

究では、バウムガルテンを擁護するために、バウムガルテンは規則よりも天性による独創性を重視したのであり、それゆえ 17 世紀の古典主義的規範詩学・修辞学から脱して 18 世紀末のロマン主義的天才美学の先駆となった、と主張されてきた。対して本研究は、バウムガルテンは美の規則の体系化によって美学を学問として確立しようとしたのだから、彼にとっては規則化による理論の整備が独創性の評価より上位の目的にあったという前提のもと、バウムガルテンがどのような構造でもって美の規則を秩序づけようと考えていたのか、「例外」の概念に注目して検討した。それによって、規範詩学・修辞学の特徴とされる規則による形式化という側から、バウムガルテン美学がもつ特徴を示した。

『美学』における規則の議論は、『形而上学』第 2 部の世界論における最善世界での例外の許容にかんする議論を応用したものであり、さらにその世界論の基礎となる概念は、『形而上学』第 1 部の存在論で定義および規定されていた。まずバウムガルテンは存在論において、規則からの逸脱である「欠陥」を、規則同士の衝突を回避するためにやむをえず、かつより強い規則を遵守してより弱い規則を斥けるような場合にのみ、「例外」として許容した。このような例外は、斥けられた規則が表す完全性を満たさないかぎりでは不完全性ではあるが、それはたんなる「欠如としての不完全性」とされ、「対立としての不完全性」から区別された。続く世界論では、最善世界における欠如としての悪の許容というライブニッツの最善説を踏襲し、完全な世界においては欠如としての不完全性である例外が許容される、と定式化された。多様の統一を原理とするヴォルフ学派においては、より大きな完全性を目指すほど規則が増え、互いに衝突する可能性が高まる。そこでバウムガルテンは、あらゆる可能的世界のうちで最善のこの世界においては極めて多くの例外が生じると、ヴォルフとは異なって最善世界における例外の多さを強調した。この主張が美学へ直接的に適用され、美においては極めて多くの例外が許容されうると述べられ、また各々の美の規則がもつ強さを顧慮するよう注意が促された。このことから、バウムガルテンは規範詩学・規範修辞学とは異なり、美においては個々の規則が衝突する可能性が極めて高いことに留意して、規則同士の強弱に応じた関係を顧慮することの重要性を意識していたことが明らかにされた。さらに筆者は、『美学講義録』の詩的自由にかんする記述から、美における例外の多さを強調することは、詩的言語が非常に大きな完全性をもつことを示す役割も果たしていたことを指摘した。以上の考察から明らかになったように、バウムガルテンが美における規則を重視したことは、美が個々の規則を画一的に適用するだけで獲得されうるものと捉えていたこととは直結せず、むしろバウムガルテンが目指していた美学の構造は、非常に大きな完全性を獲得するために多くの例外が許容されるという自由 (*licentia*) をもつ詩的言語の特徴を説明しうるような、非常に多くの規則からなる複雑かつ柔軟な体系をもった理論であった。

第 4 章と第 5 章では、修辞学とバウムガルテン美学の両者に共通して重要な概念である「フィグーラ (文彩)」について扱った。第 4 章「フィグーラの扱いをめぐる『美学』の体系問題」ではまず、この概念を扱う際に直面する、『美学』の体系にかかわる問題に取り組

んだ。

伝統的修辞学の理論は、主題を選択する「発想」、構成を定める「配置」、個々の言語表現を与える「措辞」という3部門から成り、『美学』はこれに準じて、主題となる思考ないし事柄(res)を扱う「発見論」、その配置にかんする「配列論」、個々の表現を扱う「記号論」の3章に分かたれる。ところがフィグーラについては、修辞学では第3の措辞部門の中心テーマであるにもかかわらず、バウムガルテンは発見論で多くのフィグーラをアルグーメンタとともに論じ、配列論と記号論は執筆されずに終わった。先行研究は、『美学』の発見論でフィグーラを扱うことに必然性はなく、これを『美学』の体系上の混乱を示すものとみなしてきた。対して筆者は、『美学』におけるフィグーラの扱いは、バウムガルテンが従来の修辞学には不足していた普遍性を美学へ担わせようとしていたことに起因する意図的なものであり、『美学』の体系は整合性が保たれていると主張した。その根拠として、第1に、『美学』や『美学講義録』で数多く挙げられる個々のフィグーラは修辞学におけるものを踏襲しているが、しかし美学におけるフィグーラ概念そのものは〈格別に美しい部分〉という独自の定義づけがなされ、部門の拡張とジャンルの拡張という2方向によって普遍化がなされていることを指摘した。後者の部門の拡張という観点から、バウムガルテンはフィグーラにかんしても「言葉のフィグーラ」(バウムガルテンの用語では、言語以外の記号へも拡張した「記号表示のフィグーラ」)のみならず、「思考内容のフィグーラ」と「順序のフィグーラ」にも注目すべきだと主張する。したがって、『美学』でフィグーラはそもそも第3の記号論でのみ扱われるべきではなく、思考内容のフィグーラを発見論で、順序のフィグーラを配列論で、記号表示のフィグーラを記号論で論じる予定だったのではないかと推測した。第2に、記号はその内容(事柄ないし思考)から乖離してはならず、重要なのは記号より思考であるとバウムガルテンが強調することを指摘した。それによって、修辞学で通常は「言葉のフィグーラ」とされるものまで『美学』の発見論で挙げられた事実は、バウムガルテンは思考に結びつくかぎりでの「記号内容のフィグーラ」を「思考内容のフィグーラ」に算入していたためだと説明した。以上の考察から、バウムガルテンは『美学』の各章でフィグーラを論じるつもりであったが、バウムガルテンは発見論で思考内容のフィグーラと一部の記号表示のフィグーラを論じたところで、配列論と記号論が執筆されずに終わったという解釈を提示した。

第5章「フィグーラ——修辞的文彩から〈美しい部分〉へ」では、第4章で示した『美学』におけるフィグーラ概念の普遍化の第2方向、すなわちジャンルの拡張という観点から、フィグーラ概念を考察した。なかでも、『美学講義録』においてフィグーラを絵画へ適用した、断片的な記述をとりあげて分析した。その分析をとおして、文芸のみを論じたとみなされてきたバウムガルテンの美学が、フィグーラという修辞学的概念を利用することによって造形芸術を論じる具体的な方法論を獲得していたことを解明し、さらにそのアイデアと現代修辞学の「視覚的フィグーラ」の概念との親近性を指摘した。

まずバウムガルテンは記号の概念をとおして、美学が扱いうる分野を詩や雄弁のみならず造形芸術や音楽へも拡張したこと、そして〈美しい部分〉という定義を与えたフィグーラ  
の概念については、修辞学における「言葉のフィグーラ」に対して、あらゆる記号に適用可  
能な「記号表示のフィグーラ」という概念を導入したことを確認した。そこから、近代では  
音楽論と絵画論の各分野でも修辞学およびそのフィグーラ概念の利用は様々に試みられて  
いたが、諸ジャンルすべてに適用可能な普遍的なフィグーラを提唱した点にバウムガルテ  
ンの独自性が認められることを示した。ただし、美学におけるフィグーラが絵画や音楽へも  
応用しようとバウムガルテンが明確に主張するのは後年の 1750 年代になってからであり、  
具体的な議論としては萌芽状態に留まっていたことも指摘した。『美学』では美学における  
フィグーラがもつジャンルの普遍性についてはほとんど言及されず、具体的にどのような  
ものか窺いえないが、注目すべきことに『美学講義録』では、同義法と省略法という 2 つの  
フィグーラを絵画へ適用した記述が残されている。その記述を筆者は以下のように考察し  
た。第 1 に、バウムガルテンは絵画の同義法として、或る対象を赤一色ではなく赤と深紅と  
いう複数の同系色で描くという技法を挙げた。おそらくこの事例はハラーの詩「朝の思い」  
から考案され、朝焼けの空を描いた絵画が想定されていた。第 2 に絵画の省略法としては、  
イーピゲネイアの犠牲が主題の作品で、アガメムノーンの表情を隠して描くという技法が  
挙げられた。バウムガルテンはおそらくティマンテースに由来する定型表現を指しており、  
この定型表現に言及するテキストは多く存在するが、受容者に推量させる効果を重視する  
点でバウムガルテンには古代修辞学書との共通点が見いだされた。以上の考察から、バウム  
ガルテンはテキストと絵画との相互作用のなかで、絵画におけるフィグーラの理論を断片  
的であるとはいえ具体的に考案していたことが判明した。

第 4 章と第 5 章の主題としたフィグーラ  
の概念は、『美学』ではアルグーメンタを見出し  
に掲げた節のなかで論じられる。そしてこの「アルグーメンタ（論証法）」は、伝統的修辞  
学において発想部門の中心主題を占め、『美学』においてもフィグーラとともに紙幅を割い  
て論じられる、重要な概念である。

それゆえ、本研究の掉尾となる第 6 章「アルグーメンタ——論理的・修辞的論証法から  
〈力を及ぼすもの〉へ」は、アルグーメンタの概念の考察に当てた。アルグーメンタは修辞  
学のみならず論理学においても扱われる概念である。そこで美学と論理学の原理となる『形  
而上学』第 3 部の心理学をみると、バウムガルテンはそこで「広義のアルグーメンタ」とい  
う概念を第 4 版（1757 年）という後年に、それも十分な説明なしに導入していることに気  
づく。そこで筆者はバウムガルテンの心理学および論理学と美学におけるこの概念を精査  
することによって、バウムガルテンは美学において修辞学におけるアルグーメンタの概念  
を大きく変容させ、それが要因となって『形而上学』に「広義のアルグーメンタ」の概念が  
導入された、という見解を提示した。そうして、美学におけるアルグーメンタの概念には、  
一般修辞学を基礎とした芸術論というバウムガルテン美学の独自性が発揮されていること



を主張した。

先行研究では、『美学』におけるアルグーメンタは修辭的論法概念と相違ないとみなされてきた。たしかにバウムガルテンはフィグーラについてと同様、個々のアルグーメンタについては修辭学における名称と定義を踏襲していた。しかしバウムガルテンはアルグーメンタを心理学と美学において、〈或るものの根拠として認識された表象〉と定義した。この定義は、ヴォルフ学派における「根拠」にかんする「連結」と「力」の概念についての規定を適用すると、〈論理的ないし美的な力を及ぼすもの〉と言い換えることができた。アルグーメンタはそれがもつ力の種類に応じて、認識の完全性を与える6要素に沿って分類され、そのうち真理と確実性を与える力をもつ2種が狭義の論理的ないし美的なアルグーメンタだと整理された。『論理学講義』では、アルグーメンタは推論の同義語とされ、通常の推理論以上の議論は展開されなかった。他方で『美学』と『美学講義録』においては、アルグーメンタが『形而上学』においてと同様に根拠概念によって定義され、バウムガルテン独自の6種の分類法が明示された。さらに『美学講義録』の記述からは、バウムガルテンが一連の命題の単位でない言語表現や図像による表現も、或る対象や事柄との範型や記号表示といった根拠と帰結の連結関係において捉えられるかぎり、自らの美学におけるアルグーメンタの概念に含まれると考えていたことが読みとれた。こうして論理的ないし修辭的な論証法という伝統的な意味にもはや限定されないバウムガルテンにおけるアルグーメンタの概念は、アルグーメンタというラテン語がそもそも持つ多様な語義を包括した概念だと言え、ここには、バウムガルテンが『美学』の執筆時にゲスナーの辞典を参照したことが影響しているのではないかということも指摘した。

[Redacted text block]

[REDACTED]

[REDACTED]

## 文献表

- ・ [ ] に略号を記した文献は、引用の際に略号によって示す。
- ・ 原著のスモールキャピタルおよびゲシュペルトは《》に括る。
- ・ 原著のイタリックは、引用の場合は「」に、強調の場合は〈〉に括るかあるいは傍点を付す。
- ・ 引用文中における () 内は原著による。[] あるいは [ ] 内は引用者による補足である。
- ・ 参照したおもな翻訳書は () 内に記したが、本文中の和訳は、明記がないかぎり筆者による。
- ・ 翻訳書に依拠したものは、原著を () 内に記した。
- ・ バウムガルテンのテキストには、関連する項の参照指示がしばしば記されているが、引用文中では煩瑣を避けるため省略した。

### 一次文献とその翻訳書

- Abbt, Thomas. (1978): *Alexander Gottlieb Baumgartners Leben und Character*. Halle: Hemmerde. 1765. In *Vermischte Werke*. 4. Teil. Hildesheim: Olms. 213–244.
- アリストテレス (2012(2001)): 『弁論術』 戸塚七郎訳、岩波文庫
- Baumgarten, Alexander Gottlieb. (1735): [MP] “*Meditationes philosophicae de nonnullis ad poema pertinentibus*.” Halle: Grunert. Reprint. In *Reflections on Poetry: Alexander Gottlieb Baumgarten’s Meditationes philosophicae de nonnullis ad poema pertinentibus*. Trans. Karl Aschenbrenner and William Benjamin Holther. Berkely: University of California Press, 1954. (*Philosophische Betrachtungen über einige Bedingungen des Gedichtes*. Übers. von Heinz Paetzold. Hamburg: Meiner. 1983.; *Meditazioni filosofiche su alcuni aspetti del poema*. Edizione italiana di Francesco Piselli. Milano: Vita e Pensiero, 1992.; *Esthétique précédée des Méditations philosophiques sur quelques sujets se rapportant à l’essence du poème et de la Métaphysique (§§ 501-623)*. Traduction, présentation et notes par Jean-Yves Pranchère. Paris: L’Herne, 1988) (『詩にかんする少なからざることについての哲学的省察』)
- . (1739): [MT1] *Metaphysica*. editio 1. Halle: Hemmerde. < <http://digitale.bibliothek.uni-halle.de/id/6859316> > (accessed 27. Aug. 2017). (『形而上学』第1版)
- . (1741): [VB] *Gedanken von Vernünftigen Beyfall auf Academien*. 2. Aufl. Halle: Hemmerde. In *Aufklärung* 20: 271–304, hrsg., eingeleitet und mit Anmerkungen versehen von Alexander Aichele.
- . (1741) [PB]: *Philosophische Brieffe von Aletheophilus*. Frankfurth. < <http://digitale.bibliothek.uni-halle.de/id/5100412> > (accessed 27. Aug. 2017). (『アレテオフィルスの哲学書簡』)
- . (1743): [MT2] *Metaphysica*. editio 2. Halle: Hemmerde. < <http://digitale.bibliothek.uni-halle.de/id/5233258> > (accessed 27. Aug. 2017).
- . (1750): [MT3] *Metaphysica*. editio 3. Halle: Hemmerde. < <http://digitale.bibliothek.uni-halle.de/id/5425896> > (accessed 27. Aug. 2017).
- . (1750/1758): [AE] *Aesthetica*. Frankfurt an der Oder: Kleyb. Reprint. Hildesheim: Olms. 1986. (バウムガルテン 『美学』 松尾大訳、講談社、2016; *Ästhetik*. 2 Bde., Übers. von Dagmar Mirbach. Hamburg: Meiner. 2007.)
- . [1750–51?]: [KA] “*Kollegium über die Ästhetik*.” In *Alexander Gottlieb Baumgarten*. Bernhard Poppe, S. 65–258. Leipzig: Noske. 1907. (『美学講義録』)

- . (1757): [MT4/MT] *Metaphysica*. editio 4. Halle: Hemmerde. < <http://digitale.bibliothek.uni-halle.de/id/5202099> > (accessed 27. Aug. 2017). (*Metaphysica* = *Metaphysik*. Übers. von Günter Gawlick und Lothar Kreimendahl. Stuttgart: Frommann-Holzboog. 2011.; *Metaphysics: A critical translation with Kant's elucidations, selected notes, and related materials*. translated and edited with an introduction by Courtney D. Fugate and John Hymers, London: Bloomsbury Academic, 2014) (『形而上学』第4版)
- . (1761): [AL1] *Acroasis logica in Christianum L. B. de Wolff*. editio 1. Halle: Hemmerde. Nachdruck. Christian Wolff. *Gesammelte Werke*. Hrsg. J. École et al., Abt. 3. Bd. 5. Hildesheim: Olms. 1983. (『論理学講義』)
- . (1763): [MT5] *Metaphysica*. editio 5. Halle: Hemmerde. < <http://digital.slub-dresden.de/werkansicht/dlf/11278/1/> > (accessed 27. Aug. 2017).
- . (1768): [MT5] *Metaphysica*. editio 6. Halle: Hemmerde. < <http://digitale.bibliothek.uni-halle.de/id/5194629> > (accessed 27. Aug. 2017).
- . (1769): [SE] *Sciagraphia encyclopaediae philosophicae*. Halle: Hemmerde. < <http://resolver.sub.uni-goettingen.de/purl?PPN637433246> (accessed: 27. Aug. 2017) (『哲学的百科事典の素描』)
- . (1770): [PG] *Philosophia generalis*. Halle: Hemmerde. Reprint. Hildesheim: Olms. 1968. (“Philosophia Gneralis § 147 I (Lateinisch-Deutsch)“ In *Texte zur Grundlegung der Ästhetik*, übers. u. hrsg. von Hans Rudolf Schweizer. Hamburg: Felix Meiner, 1983, S. 73–78.) (『一般哲学』)
- . (1773): [AL3] *Acroasis logica. Aucta, et in systema redacta, a Ioanne Gottlieb Toellnero*. editio 3. Halle: Hemmerde. < <http://reader.digitale-sammlungen.de/resolve/display/bsb10042700.html> > (accessed 27. Aug. 2017). (『論理学講義』第3版)
- . (1779): [MT7] *Metaphysica*. editio 7. Halle: Hemmerde. Reprint. Hildesheim: Olms, 1963.
- [anonymous]. (1762): *Catalogus librorum a viro excellentissimo amplissimo Alexandro Gottlieb Baumgarten: suos et amicorum in usus comparatorum*. Francofurti ad Viadrum: Winter. < <http://picus.unica.it/index.php?page=sfoglia.Documento&id=5&lang=en> > (accessed 27. Aug. 2017). (バウムガルテンの蔵書目録)
- [anonymous] (1765): *Bibliothecae Baumgartenianae Pars I: Quae collectionem bibliorum, exegetica, theologica et ecclesiastica continet, cum appendice bibliothecae separatae medicae et miscellaneae, et manuscriptorum*. Halle: Gebauer. < <http://picus.unica.it/index.php?page=sfoglia.Documento&id=6&lang=en> > (accessed 27. Aug. 2017).
- [anonymous] (1766): *Bibliotheca Baumgartenianae Pars II Sectio I: Quae Historica, Philosophica cum Physicis et Medicis, Philologica et alia ad disciplinas humaniores spectantia complectitur, cum appendice Epistolicorum*. Halle: Gebauer. < <http://picus.unica.it/index.php?page=sfoglia.Documento&id=7&lang=en> > (accessed 27. Aug. 2017).
- [anonymous] (1767): *Bibliotheca Baumgartenianae Pars II Sectio II: Quae Litteraria, Palaeotypa, Juridica, Gallica, Italica, Hispanica, Lusitanica, Anglica, Rabbinica, Orientalia, Miscellanea, Incompacta cum Appendice librorum omissorum varii argumenti complectitur*. Halle: Gebauer < <http://picus.unica.it/index.php?page=sfoglia.Documento&id=89&lang=en> > (accessed 27. Aug. 2017).
- Bilfinger, Georg Bernhard. (1725): [DL] *Dilucidationes philosophicae de Deo, anima humana, mundo, et generalibus rerum affectionibus*. Tübingen. In *Gesammelte Werke*, Christian Wolff, hrsg. von J. École et al., Abt. 3, Bd. 18, Hildesheim :Olms, 1982. (『神、人間の魂、世界、事物の一般的な特性についての哲学的解明』)
- Cicero, Marcus Tullius. (46BC): *Orator ad M. Brutum*.

- キケロー (1999): 「カティリーナ弾劾」『キケロー選集 3 : 法廷・政治弁論Ⅲ』小川正廣・根本英世・城江良和訳、岩波書店
- . (2001): 『キケロー選集 1 : 法廷・政治弁論 I』竹中康雄・宮城徳也・上村健二・久保田忠利訳、岩波書店
- エウリピデス (1993): 「アウリスのイピゲネイア」『ギリシア悲劇Ⅳ : エウリピデス (下)』呉茂一訳、筑摩書房、525–603
- Freyer, Hieronymus. (1725): *Oratoria*. editio 3. Halle: Orphanotropheum. < <http://digitale.bibliothek.uni-halle.de/id/4169717> > (accessed 27. Aug. 2017).
- Gesner, Johann Matthias. (1749): *Novus linguae et eruditionis romanae thesaurus*. 4 Bde. Leipzig: Lipsiae. < <http://www.uni-mannheim.de/mateo/camenaref/gesner.html> > (accessed 27. Aug. 2017).
- Hallbauer, Friedrich Andreas. (1725): *Anweisung zur verbesserten teutschen Oratorie*. Jena: Hartung. < <http://digital.slub-dresden.de/werkansicht/dlf/67296/1/26> > (accessed 27. Aug. 2017).
- Haller, Albrecht von. (1748): “Morgen-Gedanken.” In *Versuch Schweizerischer Gedichte*. 4. Aufl. 11–13. Göttingen. < <https://books.google.co.jp/books?id=siYHAAAQAQAJ> > (accessed 27. Aug. 2017).
- Herder, Johann Gottfried. (1769): *Kritische Wälder, oder Betrachtungen über die Wissenschaft und Kunst des Schönen*, Wäldchen 4, Riga.
- Kant, Immanuel. (1787): [KrV] *Kritik der reinen Vernunft*. 2. Aufl. *Kant's gesammelte Schriften*. Hrsg. von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften. Abt. 1. Bd. 3. Berlin: Reimer. 1973 (1911). < <https://korpora.zim.uni-duisburg-essen.de/kant/aa03/> > (accessed 27. Aug. 2017).
- . (1790): [KU] *Kritik der Urteilskraft*. Hrsg. Heiner F. Klemme. 2. Aufl. Hamburg: Meiner. 2009
- ライプニッツ、ゴットフリート・ヴィルヘルム (1990): 『ライプニッツ著作集第 6 巻 : 宗教哲学「弁論論」上』佐々木能章訳、下村寅太郎・山本信・中村幸四郎・原亨吉監修、工作舎 (Gottfried Wilhelm Leibniz. *Essais de Théodicée sur la bonté de Dieu, la liberté de l'homme et l'origine du mal*. 1710.)
- Lessing, Gotthold Ephraim. (1788(1766)): *Laokoon: Oder über die Grenzen der Mahlerey und Poesie*. hrsg. Karl Gotthelf. Berlin: Voss. (レッシング『ラオコオン : 絵画と文学との限界について』斎藤栄治訳、岩波文庫、2003)
- Maximus, Valerius. (ca. 30) : *Factorum et Dictorum Memorabilium Libri Novem*.
- Meier, Georg Friedrich. (1752): [VL] *Vernunftlehre*. 2 Teile. Halle: Gebauer. *George Friedrich Meiers Vernunftlehre*. Hrsg. Günter Schenk. Halle: Hallescher Verlag. 1997
- . (1754): [SW2] *Anfangsgründe aller schönen Wissenschaften*. 2. Aufl. Teil 1. Halle: Hemmerde. Nachdruck. Hildesheim: Olms. 1976.
- . (1758): [ASW] *Auszug aus den Anfangsgründe aller schönen Künste und Wissenschaften*. Halle: Hemmerde. < [https://books.google.co.jp/books?id=aFgHAAAQAQAJ&dq=auszug+sch%C3%B6nen+meier&hl=ja&source=gbs\\_navlinks\\_s](https://books.google.co.jp/books?id=aFgHAAAQAQAJ&dq=auszug+sch%C3%B6nen+meier&hl=ja&source=gbs_navlinks_s) > (accessed 27. Aug. 2017).
- . (1760): [AVL2] *Auszug aus der Vernunftlehre*. 2. Aufl. Halle: Gebauer. < [https://books.google.co.jp/books?id=4m8PAAAQAQAJ&redir\\_esc=y](https://books.google.co.jp/books?id=4m8PAAAQAQAJ&redir_esc=y) > (accessed 27. Aug. 2017).
- . (1763): *Alexander Gottlieb Baumgartens Leben*. Halle : Hemmerde. Hrsg. Hans-Joachim Kertscher, Halle: Universitätverlag Halle-Wittenberg. 2012.
- . (1755-1759): [MK] *Metaphysik*. 4 Bände. Halle: Gebauer. < <https://archive.org/details/metaphysik0102meieuoft>; <https://archive.org/details/metaphysik34meieuoft> > (accessed 27. Aug. 2017).
- . (1765): [MK] *Metaphysik*. 2. Aufl. Bd. 3. Band. Halle: Gebauer. Nachdruck. Christian Wolff. *Gesammelte Werke*. Hrsg. J. École et al., Abt. 3. Bd. 108.3 Hildesheim: Olms. 2007.
- オウイディウス (1981): 『変身物語 (上)』中村善也訳、岩波文庫

- . (1998): 『悲しみの歌／黒海からの手紙』木村健治訳、京都大学学術出版会
- Plinius, Gaius Secundus. (ca. 77): *Naturalis Historia*. (プリニウス『プリニウスの博物誌Ⅲ』中野定雄・中野里美・中野美代訳、雄山閣出版、1986)
- Quintilianus, Marcus Fabius. (ca. 95): *Institutio Oratoria*. (クインティリアヌス『弁論家の教育Ⅰ-Ⅳ』森谷宇一・戸高和弘・渡辺浩司・伊達立晶訳、京都大学学術出版会、2005-2016)
- Sulzer, Johann Georg. (1792): *Allgemeine Theorie der schönen Künste*. 2. Aufl. Teil 2. Leipzig. Reprint. Olms, 1967.
- ウェルギリウス (2001): 『アエネーイス』岡道男・高橋宏幸訳、京都大学学術出版会
- Walch, Johann Georg. (1775). *Philosophisches Lexicon*. 4. Aufl. Leipzig: Gledischens. Nachdruck. Hildesheim: Olms. 1968.
- Wolff, Christian. (1712): [DL] *Vernünfftige Gedanken von den Kräften des menschlichen Verstandes und ihrem richtigen Gebrauche in Erkenntnis der Wahrheit*. Halle. Nachdruck. *Gesammelte Werke*. Hrsg. J. École et al., Abt. 1. Bd. 1. 2. Aufl. Hildesheim: Olms. 1978 (1965).
- . 1740(1728): [DP] *Discursus praeliminaris de philosophia in genere*. Frankfurt, In *Christiani Wolfii Philosophia rationalis sive Logica*, *Gesammelte Werke*, hrsg. von J. École et al., Abt. 2, Bd. 1, Hildesheim: Olms, 1983. (ヴォルフ「哲学一般についての予備的叙説」山本道雄・松家次朗訳、山本道雄『ドイツ啓蒙の哲学者 クリスティアン・ヴォルフのハレ追放顛末記：ドイツ啓蒙思想の一潮流 2』129-265)
- . 1740(1728): [LL] *Philosophia rationalis sive Logica*, *Gesammelte Werke*, hrsg. von J. École et al., Abt. 2, Bd. 1, Hildesheim: Olms, 1983.
- . (1736): [LO] *Philosophia prima sive ontologia*. 2. Aufl. Frankfurt und Leipzig. Nachdruck. *Gesammelte Werke*. Hrsg. J. École et al., Abt. 2. Bd. 1. Hildesheim: Olms. 1977.
- . (1737): [LC] *Cosmologia generalis*. 2. Aufl. Frankfurt und Leipzig. Nachdruck. *Gesammelte Werke*. Hrsg. J. École et al., Abt. 1. Bd. 4. Hildesheim: Olms, 1964.
- . (1751): [DM] *Vernünfftige Gedancken von Gott, der Welt und der Seele des Menschen, auch allen Dingen überhaupt*. 11. Aufl. Halle: Rengerische Buchhandlung. Nachdruck. *Gesammelte Werke*. Hrsg. Jean École et al., Abt. 1. Bd. 2.1-2.2. Hildesheim: Olms. 2009 (1983).
- Zedler, Johann Heinrich. (1731-1754): *Grosses vollständiges Universal-Lexicon aller Wissenschaften und Künste*. < <http://www.zedler-lexikon.de/> > (accessed 27. Aug. 2017).

## 二次文献

- Alt, Peter-André. (2007) : *Aufklärung*. 3. Aufl. Stuttgart: Metzler.
- Baeumler, Alfred. (1967): *Das Irrrationalitätsproblem in der Ästhetik und Logik des 18. Jahrhunderts bis zur Kritik der Urteilskraft*. Tübingen: Niemeyer. (*Kants Kritik der Urteilskraft: Ihre Geschichte und Systematik*. Halle, 1923.)
- . (1972): *Ästhetik*. München: Oldenbourg. 1934.
- Bahr, Petra. (2004): *Darstellung des Undarstellbaren: Religionstheoretische Studien zum Darstellungsbegriff bei A. G. Baumgarten und I. Kant*. Tübingen: M. Siebeck.
- Bartel, Dietrich. (1997): *Musica Poetica: Musical-Rhetorical Figures in German Baroque Music*. Lincoln.
- バルト、ロラン (2005(1979)): 『旧修辞学：便覧』沢崎浩平訳、みすず書店 (Roland Barthes. “L'ancienne rhétorique, aide-mémoire.” *Communications* 16: 172-223. 1970.)
- Beiser, Frederick C. (2011): *Diotima's Children: German Aesthetic Rationalism from Leibniz to Lessing*. Oxford University Press.

- Bender, John and David E. Wellbery. (1990): *The End of Rhetoric*. Stanford.
- Bender, Wolfgang. (1980): “Rhetorische Tradition und Ästhetik im 18. Jahrhundert: Baumgarten, Meier und Breitingen.” *Zeitschrift für deutsche Philologie* 99: 481–506.
- Bergmann, Ernst. (1911): *Die Begründung der deutschen Ästhetik durch Alex. Gottlieb Baumgarten und Georg Friedrich Meier*; Leipzig: Röder & Schunke.
- Berndt, Fraucke. (2011): *Poema – Gedicht: Die epistemische Konfiguration der Literatur um 1750*. Berlin: de Gruyter.
- ベーメ、ゲルノート (2005): 『感覚学としての美学』井村彰・小川真人・阿部美由起・益田勇一訳、勁草書房 (Gernot Böhme. *Aisthetik: Vorlesungen über Ästhetik als allgemeine Wahrnehmungslehre*. München: Wilhelm Fink, 2001.)
- Bornscheuer, Lothar. (2000): “Toposforschung? Gewiß! Aber im Lichte des zu Erforschenden: im Lichte der U-topie, zum topikgeschichtlichen Paradigmenwechsel bei Vico und Baumgarten.” In *Topik und Rhetorik*, hrsg. von Thomas Schirren und Gert Ueding, S. 275–306. Tübingen: Niemeyer.
- Buchenaus, Stefanie. (2013): *The Founding of Aesthetics in the German Enlightenment: The Art of Invention and the Invention of Art*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Campe, Rüdiger. (1990): *Affekt und Ausdruck: Zur Umwandlung der literarischen Rede im 17. und 18. Jahrhundert*. Tübingen: de Gruyter.
- . (2014a): “Bella Evidentia: Der Begriff und die Figur der Evidenz in Baumgartens Ästhetik.” In *Baumgarten-Studien: Zur Genealogie der Ästhetik*. Rüdiger Campe, Anselm Haverkamp und Christoph Menke, S. 49–72. Berlin: Augst. (“Bella Evidentia: Begriff und Figur von Evidenz in Baumgartens Ästhetik.” *Deutsche Zeitschrift für Philosophie* 49 (2): 243–256, 2001.)
- . (2014b): “Effekt der Form: Baumgartens Ästhetik am Rande der Metaphysik.” In *Baumgarten-Studien: Zur Genealogie der Ästhetik*. Rüdiger Campe, Anselm Haverkamp und Christoph Menke, S. 117–144. Berlin: Augst. (“Der Effekt der Form: Baumgartens Ästhetik am Rande der Metaphysik.” In *Literatur als Philosophie, Philosophie als Literatur*. Hrsg. von Eva Horn, Bettine Menke, und Christoph Menke, 17–33. München: Wilhelm Fink, 2005.)
- . (2014c): “Vier Tropen bei Vico und Baumgarten: Zur Inversion von Kulturwissenschaft und Ästhetik.” In: *Baumgarten-Studien: Zur Genealogie der Ästhetik*. Rüdiger Campe, Anselm Haverkamp und Christoph Menke, S. 173–201. Berlin: Augst.
- Cassirer, Ernst (2007): *Die Philosophie der Aufklärung*. Hamburg: Felix Meiner, 1932. (『啓蒙主義の哲学』中野好之訳、紀伊國屋書店、1997年)
- クローチェ、ベネデット (1930): 『美学』長谷川誠也・大槻憲二訳、春秋社 (Benedetto Croce. *Estetica come scienza dell'espressione e linguistica generale*. Sandron, 1902.)
- クルツィウス、エルンスト・ロベルト (1991): 『ヨーロッパ文学とラテン中世』南大路振一・岸本通夫・中村善也訳、みすず書房 (Ernst Robert Curtius. *Europäische Literatur und lateinisches Mittelalter*. Bern: Francke, 1948.)
- 伊達立晶 (2003): 「古典弁論術から近代美学へ: ドライデンにおける『発想』概念を中心に」『古典弁論術 (レトリック) の理論と実践に関する歴史的・体系的な研究』平成 11–13 年度科学研究費補助金研究成果報告書、45–78
- Dockhorn, Klaus. (1949): “Die Rhetorik als Quelle des vorromantischen Irrationalismus in der Literatur- und Geistesgeschichte.” In *Macht und Wirkung der Rhetorik: Vier Aufsätze zur Ideengeschichte der Vormoderne*. Bad Homburg: Gehlen, 46–95.
- ドゥエ、フランソワーズ (2008): 「異議あり、一八世紀フランスのレトリックは転義法に「限定」されてはいない」黒木朋興訳、『物語研究』8: 74–84.
- Franke, Ursula. (1972): *Kunst als Erkenntnis: Die Rolle der Sinnlichkeit in der Ästhetik des Alexander*

- Gottlieb Baumgarten, *Studia Leibnitiana Supplementa* 9, Wiesbaden: Franz Steiner.
- . “Ist Baumgartens Ästhetik aktualisierbar? Bemerkungen zur Interpretation von H. R. Schweizer.”  
*Studia Leibnitiana* 6(2): 272–278.
- Fullenwider, Henry. (1989): “‘The Sacrifice of Iphigenia’ in French and German Art Criticism, 1755–1757.” *Zeitschrift für Kunstgeschichte* 52 (4): 539–549.
- ガダマー、ハンス・ゲオルグ (1986): 『真理と方法 I』 饒田収・麻生建・三島憲一・北川東子・我田広之・大石紀一郎訳、法政大学出版局 (Hans-Georg Gadamer, *Wahrheit und Methode*. Tübingen: Mohr, 1975(1960).)
- ガシェ、ロドルフ (2012): 「ヒュポテュポーシス : カントにおける感性的描出 (hypotyposis) の概念についてのいくつかの考察」宮崎裕助・福島健太訳『知のトポス : 世界の視点』7: 175–212. (Rodolphe Gasché. “Some reflections on the notion of hypotyposis in Kant.” *Argumentation* 4(1): 85–100, 1900.)
- Gawlick, Günter and Lothar Kreimendahl. (2011): “Einleitung.” In *Metaphysica = Metaphysik*. Stuttgart: Frommann-Holzboog.
- ジュネット、ジェラルド (1987): 「限定された修辞学」天野利彦訳『フィギュール 3』花輪光監修、書肆風の薔薇、41–103 (Gérard Genette. “La rhétorique restreinte” *Communications* 16: 158–171, 1970.)
- Groß, Steffen W. (2011): *Felix aestheticus: Ästhetik als Lehre vom Menschen*, Würzburg: Königshausen & Neumann.
- 萩原康一郎 (2010): 「レトリックの拡張と膨張 : 現代レトリック論の展開と前提」『古代ローマにおける弁論術の形成と発展』平成 18–21 年度科学研究費補助金研究成果報告書
- Haverkamp, Anselm. (1998): “Metaphora dis/continua: Figure in de/construction: Mit einem Kommentar zur Begriffsgeschichte von Quintilian bis Baumgarten.” In: *Allegorie: Konfigurationen von Text, Bild und Lektüre*. Hrsg. Eva Horn und Manfred Weinberg. S. 29–45. Opladen: Westdeutscher Verlag.
- . (2002): *Figura Cryptica: Theorie der literarischen Latenz*. Frankfurt am Main: Suhrkamp.
- . (2014): “‘Wie die Morgenröthe’: Baumgartens Innovation.” In *Baumgarten-Studien: Zur Genealogie der Ästhetik*. Rüdiger Campe, Anselm Haverkamp und Christoph Menke, S. 49–72. Berlin: Augst. (“Wie die Morgenröthe zwischen Nacht und Tag: Alexander Gottlieb Baumgarten und die Begründung der Kulturwissenschaften in Frankfurt an der Oder.” *Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte* 76: 3–15, 2002.)
- 樋笠勝士・井奥陽子・津田栞里 (2015): 「バウムガルテン『形而上学』(第 4 版)「経験的心理学」訳注 : その 1」『成城文藝』233/234: 53–73.
- . (2016): 「バウムガルテン『形而上学』(第 4 版)「経験的心理学」訳注 : その 2」『成城文藝』237/238: 154–169.
- . (2017): 「バウムガルテン『形而上学』(第 4 版)「経験的心理学」訳注 : その 3」『成城文藝』241: 39–53. (近刊予定)
- Hlobil, Tomás. (2005): “Aesthetics in the Lecture Lists of the Universities of Halle, Leipzig, Würzburg and Prague, 1785–1805.” *Das achtzehnte Jahrhundert* 29 (1): 13–50.
- Howell, A. C. (1946): “Res et Verba: Words and Things.” *English Literary History* 13 (2): 131–42.
- Juchem, Hans-Georg. (1970): *Die Entwicklung des Begriffs des Schönen bei Kant*. Bonn: Bouvier.
- Lausberg, Heinrich. (2008): *Handbuch der literarischen Rhetorik: Eine Grundlegung der Literaturwissenschaft*, München: Max Hueber. 1960.
- リー、レンサレアー・ライト (1984): 「詩は絵のごとく : 人文主義絵画論」『絵画と文学 : 絵



- は詩のごとく』中森義宗・篠塚二三男訳, 194–362. 中央大学出版部. (Rensselaer W. Lee. “Ut Pictura Poesis: The Humanistic Theory of Painting.” *The Art Bulletin* 22(4): 197–269, 1940.)
- Lekschas, Jan. Alexander Gottlieb Baumgarten. < <http://jan.lekschas.de/> > (accessed 27. Aug. 2017).
- Linn, Marie Luise. (1967): “A. G. Baumgartens ‘Aesthetica’ und die antike Rhetorik.” *Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte* 41(3): 424–443.
- Lotze, Rudolf Hermann. (1868): *Geschichte der Aesthetik in Deutschland*. München: Cotta.
- 松尾大 (1985): 「バウムガルテンの外延的明瞭性の概念をめぐって」『前カント的・非カント的美学の射程』昭和 58–59 年度科学研究費補助金研究成果報告書、58–67.
- . (1987): 「解説」バウムガルテン『美学』松尾大訳、玉川大学出版会、521–539.
- . (1990): 「完全性の美学の帰趨：バウムガルテンとカント」廣松渉・坂部恵・加藤尚武編『講座ドイツ観念論第 1 巻』弘文堂、317–341.
- . (2000): 「カントのバウムガルテン批判」『美学』50(4): 1–12. (“Kants Kritik an Baumgartens Ästhetik.” *Aesthetics* 10 :1–14, 2002)
- . (2002): 「カントにおける美的理念の概念の修辞学的基底」『東京芸術大学美術学部紀要』38: 5–24.
- . (2014): 「バウムガルテンの『美学』の基本構造の淵源としてのレトリック」『弁論術から美学へ：美学成立における古代弁論術の影響』平成 23–25 年度科学研究費補助金研究成果報告書、81–91.
- Menke, Christoph. (2001): “Schwerpunkt, zur Aktualität der Ästhetik von Alexander G. Baumgarten.” *Deutsche Zeitschrift für Philosophie* 49(2): 229–231.
- McHam, Sarah Blake. (2013): *Pliny and the Artistic Culture of the Italian Renaissance : The Legacy of the Natural History*. New Haven: Yale University Press.
- Mirbach, Dagmar. Alexander Gottlieb Baumgarten. < <http://www.baumgarten-alexander-gottlieb.de> > (accessed 27. Aug. 2017).
- Moffitt, John F. (2005): “Sluter’s ‘Pleurants’ and Timanthes’ ‘Tristitia Velata’: Evolution of, and Sources for a Humanist Topos of Mourning.” *Artibus et Historiae* 26 (51): 73–84.
- Nannini, Alessandro. (2014): “L’idea estetica di “chiarezza estensiva” e la sua genesi nella filosofia Wolffiana.” *Rivista di Storia Della Filosofia* 69(3): 421–442.
- . (2017): “Alexander G. Baumgarten and the Lost Letters of Aletheophilus: Notes on a Mystery at the Origins of Modern Aesthetics.” *Diciottesimo secolo* 2:23–43.
- 根占献一 (2005): 『フィレンツェ共和国のヒューマニスト』創文社
- Niggli, Ursula. (1998): *Die Vorreden zur Metaphysik*, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann.
- 西原稔 (1983): 「ドイツ啓蒙主義の音楽美学：シャイベと 1750 年前後における「感性学」としての音楽美学の諸問題」『東京芸術大学音楽学部年誌』9: 29–53.
- Nivelle, Armand. (1971): *Kunst- und Dichtungstheorien zwischen Aufklärung und Klassik*. 2. Aufl. Berlin: de Gruyter.
- 小田部胤久 (1995): 『象徴の美学』東京大学出版会
- Paetzold, Heinz. (1995): “Rhetorik-Kritik und Theorie der Künste in der Philosophischen Ästhetik von Baumgarten bis Kant.” In *Von der Rhetorik zur Ästhetik: Studien zur Entstehung der modernen Ästhetik im 18. Jahrhundert*. Hrsg. Gérard Raulet, 7–37. Rennes: MSH.
- Pappalardo, Umberto. (2009): *The Splendor of Roman Wall Painting*. Los Angeles.
- Peres, Constanze. (2000): “Komplexität und Mangel ästhetischer Zeichen: Baumgartens (proto)semiotische Theorie und Goodmans Symptome der Kunst.” *Studia Leibnitiana* 32 (2): 215–236.
- Perry, Ellen E. (2002): “Rhetoric, Literary Criticism, and the Roman Aesthetics of Artistic Imitation.” In *The Ancient Art of Emulation : Studies in Artistic Originality and Tradition from the Present*

- to *Classical Antiquity*. Ed. Elaine K. Gazda, 153–171. Ann Arbor.
- Poppe, Bernhard. (1907): *Alexander Gottlieb Baumgarten*. Leipzig: Noske.
- ルブール、オリヴィエ (2000):『レトリック』佐野泰雄訳、白水社 (Olivier Reboul. *La rhétorique*. Presses Universitaires de France, 1993(1984).)
- Schanze, Helmut. (1982): “Probleme einer »Geschichte der Rhetorik« ” *Zeitschrift für Literaturwissenschaft und Linguistik* 11(43/44): 13–23.
- 佐藤信夫・佐々木健一・松尾大 (2006):『レトリック事典』大修館書店
- Schenk, Günter. Mejer, Regina. (2006): *Ethisch-pietistische Prägungen der Logik im 18. Jahrhundert in Halle: Alexander Gottlieb Baumgarten, Georg Friedrich Meier*. Halle: Schenk.
- Schwaiger, Clemens. (2011): *Alexander Gottlieb Baumgarten - ein intellektuelles Porträt: Studien zur Metaphysik und Ethik von Kants Leitautor*, Stuttgart: fromann-Holzboog.
- Schweizer, Hans Rudolf. (1973): *Ästhetik als Philosophie der sinnlichen Erkenntnis*. Basel: Schwabe.
- . (1983): “Einführung.” In *Texte zur Grundlegung der Ästhetik*. Hamburg: Felix Meiner. VII–X X IV.
- 渋谷拓 (2011): 「フランスの絵画論における誇張の観念：ド・ピール、C. - A. コワペル、ディドロの場合」『成城大学美学美術史論集』19: 137–151.
- Solms, Friedhelm (1990): *Disciplina aethetica: Zur Frühgeschichte der ästhetischen Theorie bei Baumgarten und Herder*. Stuttgart: Klett-Cotta.
- Spencer, John R. (1957): “Ut Rhetorica Pictura: A Study in Quattrocento Theory of Painting.” *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes* 20 (1/2): 26–44.
- 高橋克 (1989): 「ドイツ思想詩の黎明 2：ハラール「朝の思い」(1725年)〔含独文〕」『高知大学学術研究報告人文科学』38 (2): 215–254.
- Tedesco, Salvatore. (2008): “A. G. Baumgartens Ästhetik im Kontext der Aufklärung: Metaphysik, Rhetorik, Anthropologie.” *Aufklärung* 20: 137–150.
- Till, Dietmar. (2004): *Transformationen der Rhetorik: Untersuchungen zum Wandel der Rhetoriktheorie im 17. und 18. Jahrhundert*. Tübingen: de Gruyter.
- トドロフ、ツヴェタン (2011):『象徴の理論』及川馥・一之瀬正興訳、法政大学出版局、1987年 (Tzvetan Todorov. *Théories du symbole*. Paris: Seuil, 1977.)
- Ueding, Gert. (2000): *Moderne Rhetorik: Von der Aufklärung bis zur Gegenwart*. München.
- . hrsg. (1996): *Historisches Wörterbuch der Rhetorik*. Band 3. Tübingen, s.v. “Figurenlehre” von Joachim Knappe.
- Varga, A. Kibédi. (1989): “Rhetorik, Poetik und die Kunsttheorie.” In *Zur Terminologie der Literaturwissenschaft: Akten des IX. Germanistischen Symposions der deutschen Forschungsgemeinschaft, Würzburg 1986*. Hrsg. Christian Wagenknecht, 209–221. Stuttgart.
- Verweyen, Theodor. (1989): „»Halle, die Hochburg des Pietismus, die Wiege der Anakreontik«: Über das Konfliktpotential der anakreontischen Poesie als Kunst der »sinnlichen Erkenntnis«.“ In *Zentren der Aufklärung I: HALLE Aufklärung und Pietismus*, hrsg. von Norbert Hinske, Heiderberg: Lambert Schneider, 209–238.
- Verweyen, Theodor, und Gunther Witting. (1995): „Zur Rezeption Baumgartens bei Uz, Gleim und Rudnick.“ In *Dichtungstheorien der deutschen Frühaufklärung*, hrsg. von Theodor Verweyen, Tübingen:Max Niemeyer, 101–119.
- Weimar, Klaus. Hrsg. (2007): *Reallexikon der deutschen Literaturwissenschaft: Neubearbeitung des Reallexikons der deutschen Literaturgeschichte*. Bd. 5. Berlin: de Gruyter. s. v. „Poetische Lizenz“ von Lutz-Hennig Pietsch.
- ヴェルシュ、ヴォルフガング (1998):『感性の思考：美的リアリティの変容』小林信之訳、

- 勁草書房 (Wolfgang Iser. *Ästhetisches Denken*. Stuttgart: Reclam, 1990.)
- Wesche, Jörg. (2004): *Literarische Diversität: Abweichungen, Lizenzen und Spielräume in der deutschen Poesie und Poetik der Barockzeit*. Tübingen: Niemeyer.
- ヴァインデルバント、ヴィルヘルム (1956): 『西洋近世哲學史』 豊川昇訳、新潮社 (Wilhelm Windelband. *Die Geschichte der neueren Philosophie: In ihrem Zusammenhange mit der allgemeinen Kultur und den besonderen Wissenschaften*. Leipzig: Breitkopf, 1922(1878).)
- Wiswall, Dorothy Roller. (1981): *A Comparison of Selected Poetic and Scientific Works of Albrecht von Haller*. Berne: P. Lang.
- Witte, Egbert. (2000): *Logik ohne Dornen: Die Rezeption von A. G. Baumgartens Ästhetik im Spannungsfeld von logischem Begriff und ästhetischer Anschauung*. Hildesheim: Olms.
- 山本道雄 (2010): 『カントとその時代：ドイツ啓蒙思想の一潮流』 改定増補版、晃洋書房
- . (2016): 『ドイツ啓蒙の哲学者 クリスティアン・ヴォルフのハレ追放顛末記：ドイツ啓蒙思想の一潮流 2』 晃洋書房
- Zimmermann, Robert. (1858): *Geschichte der Aesthetik als philosophischer Wissenschaft*. Wien: Braumüller.